

珠洲市

大谷中学校東遺跡

2010

石川県教育委員会

(財)石川県埋蔵文化財センター

おおたにちゅうがっこうひがし
大谷中学校東遺跡

2010

石川県教育委員会
(財)石川県埋蔵文化財センター

例 言

- 1 本書は大谷中学校東遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は珠洲市馬繰町^{つるぎ}地内である。
- 3 調査原因は国道改築一般国道249号（大谷道路）であり、同事業を所管する石川県土木部道路建設課（奥能登土木総合事務所）が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 調査は財団法人石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて、平成18（2006）年度から平成21（2009）年度にかけて実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書作成・刊行である。
- 5 調査に係る費用は石川県土木部道路建設課（奥能登土木総合事務所）が負担した。
- 6 現地調査は平成18（2006）年度に実施した。期間・面積・担当課・担当者は下記の通りである。
期 間 平成18年5月10日～同年7月24日
面 積 1,150㎡（第1面450㎡、第2面450㎡、第3面250㎡）
担当課 調査部調査第3課
担当者 土屋宣雄（調査専門員）、宮川勝次（主任主事）
- 7 出土品整理は平成18・19年度に実施し、企画部整理課が担当した。
- 8 報告書の作成は平成20年度に、報告書編集・刊行は平成21年度に実施し、調査部県関係事業調査グループが担当した。執筆分担は下記のとおりである。編集は土屋宣雄（調査部県関係事業調査グループ専門員）が行った。
第1章、第2章、第3章第1節・3節3～22・4節1～4：宮川勝次（企画部企画・普及グループ主任主事）
第3章第2節・3節1～2・4節5、第4章：土屋宣雄
- 9 調査には下記の機関、個人の協力を得た（五十音順、敬称略）。
石川県土木部道路建設課、奥能登土木総合事務所、珠洲市教育委員会、珠洲市立大谷公民館、池田 拓、助光澄江、吉中正和
- 10 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 11 本書についての凡例は下記のとおりである。
 - (1) 方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅶ系に準拠した。
 - (2) 水平基準は海拔高であり、T. P.（東京湾平均海面標高）による。
 - (3) 出土遺物番号は挿図と写真で対応する。
 - (4) 遺物実測図については、須臾器は断面黒塗り、その他は断面白抜きとし、土師器の内黒処理のものは網掛けでその範囲を示した。

目次

| | |
|--------------------|----|
| 第1章 調査に至る経緯と経過 | 1 |
| 第1節 調査に至る経緯 | 1 |
| 第2節 発掘作業の経過 | 1 |
| 第3節 出土品整理、報告書作成・刊行 | 2 |
| 第2章 遺跡の位置と環境 | 3 |
| 第1節 遺跡の位置と地理的環境 | 3 |
| 第2節 歴史的環境 | 4 |
| 第3章 調査の方法と成果 | 7 |
| 第1節 調査の方法 | 7 |
| 第2節 基本層序 | 8 |
| 第3節 遺構 | 12 |
| 第4節 遺物 | 29 |
| 第4章 まとめ | 56 |

挿 図 目 次

| | | | | | |
|------|--|----|------|-------------------------|----|
| 第1図 | 遺跡の位置図 | 3 | 第17図 | 第3面遺構図・断面図1 (S=1/80、40) | 27 |
| 第2図 | 珠洲市の製塩遺跡分布図 (S=1/200,00) | 5 | 第18図 | 第3面遺構図2 (S=1/80) | 28 |
| 第3図 | 周辺の遺跡 (S=1/50,000) | 6 | 第19図 | 製塩土器例壺型脚台タイプ脚台部底径指数 | 36 |
| 第4図 | 調査区位置図 (S=1/5,000) | 7 | 第20図 | 遺物実測図1 (S=1/3) | 37 |
| 第5図 | 調査区区割図・トレンチ位置図、トレンチ① 土層断面図 (S=1/400、40) | 9 | 第21図 | 遺物実測図2 (S=1/3) | 38 |
| 第6図 | トレンチ②・③土層断面図 (S=1/40) | 10 | 第22図 | 遺物実測図3 (S=1/3) | 39 |
| 第7図 | トレンチ④・⑤土層断面図 (S=1/40) | 11 | 第23図 | 遺物実測図4 (S=1/3) | 40 |
| 第8図 | 第1面遺構全体図 (S=1/200) | 18 | 第24図 | 遺物実測図5 (S=1/3) | 41 |
| 第9図 | 第2・3面遺構全体図 (S=1/200) | 19 | 第25図 | 遺物実測図6 (S=1/3) | 42 |
| 第10図 | 第1面遺構図・断面図1 (S=1/40) | 20 | 第26図 | 遺物実測図7 (S=1/3) | 43 |
| 第11図 | 第1面遺構図・断面図2 (S=1/80、40) | 21 | 第27図 | 遺物実測図8 (S=1/3) | 44 |
| 第12図 | 第1面遺構図・断面図3 (S=1/40) | 22 | 第28図 | 遺物実測図9 (S=1/3) | 45 |
| 第13図 | 第2面遺構図・断面図1 (S=1/40) | 23 | 第29図 | 遺物実測図10 (S=1/3) | 46 |
| 第14図 | 第2面遺構図・断面図2 (S=1/40) | 24 | 第30図 | 遺物実測図11 (S=1/3) | 47 |
| 第15図 | 第2面遺構図3 (S=1/80) | 25 | 第31図 | 遺物実測図12 (S=1/3) | 48 |
| 第16図 | 第2面断面図3 (S=1/40) | 26 | 第32図 | 遺物実測図13 (S=1/3) | 49 |

表 目 次

| | | | | | |
|-----|-------------|----|-----|----------|----|
| 第1表 | 珠洲市の製塩遺跡一覧表 | 5 | 第5表 | 出土遺物観察表3 | 52 |
| 第2表 | 周辺の遺跡地名表 | 6 | 第6表 | 出土遺物観察表4 | 53 |
| 第3表 | 出土遺物観察表1 | 50 | 第7表 | 出土遺物観察表5 | 54 |
| 第4表 | 出土遺物観察表2 | 51 | 第8表 | 出土遺物観察表6 | 55 |

図 版 目 次

| | | | |
|------|------|------|--------|
| 図版1 | 遺構1 | 図版11 | 出土遺物1 |
| 図版2 | 遺構2 | 図版12 | 出土遺物2 |
| 図版3 | 遺構3 | 図版13 | 出土遺物3 |
| 図版4 | 遺構4 | 図版14 | 出土遺物4 |
| 図版5 | 遺構5 | 図版15 | 出土遺物5 |
| 図版6 | 遺構6 | 図版16 | 出土遺物6 |
| 図版7 | 遺構7 | 図版17 | 出土遺物7 |
| 図版8 | 遺構8 | 図版18 | 出土遺物8 |
| 図版9 | 遺構9 | 図版19 | 出土遺物9 |
| 図版10 | 遺構10 | 図版20 | 出土遺物10 |

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

大谷中学校東遺跡の発掘調査は国道改築一般国道249号（大谷道路）に係るものである。一般国道249号は七尾市を起点に能登半島を周回し、金沢市に至る、総延長約235kmを測る道路である。そのうち大谷道路は珠洲市若山町から大谷町の7.6kmの区間が該当し、過去に大谷トンネル建設に伴う道路付け替え工事に係り、大谷則貞遺跡の調査が実施されている。

今回はその延長で主要地方道大谷狼煙飯田線との接合箇所における道路工事を起因とし、県土木部道路建設課（奥能登土木総合事務所）からの依頼により、県教育委員会文化財課が試掘調査を実施した。試掘調査は平成17年4月27日、7月6日に実施され、対象範囲の一部において、埋蔵文化財（周知の埋蔵文化財包含地・大谷中学校東遺跡）を確認した。そこで、事前に発掘調査を実施する必要が生じたことから、県土木部道路建設課（奥能登土木総合事務所）は文化財課に発掘調査を依頼し、文化財課は財団法人石川県埋蔵文化財センターに発掘調査を委託した。

第2節 発掘作業の経過

発掘調査は県教育委員会文化財課の委託事業として、財団法人石川県埋蔵文化財センター調査部調査第3課が担当し、平成18年5月10日から同年7月24日にかけて実施した。4月20日に奥能登土木総合事務所、県教育委員会文化財課、埋蔵文化財センターによる現地協議を実施し、調査範囲や仮設ハウス設置箇所等の確認を行った。また、調査工程として5月10日からセンター側の表土掘削作業に入る確認がなされた。

5月10日から14日にかけて表土掘削作業を行い、5月15日からは作業員の参加を得て、発掘器材の搬入、仮設ハウスや調査区周辺的环境整備を行った。18日から第1面に相当する遺構面を精査し、それと並行して、調査区南北トレンチを入れ、下層確認を行った。基本的に焼土層、炭層、部分的に粘土層が互層状態で堆積することから、製塩作業面（遺構面）が複数存在する可能性があり、上層から棒状脚平底型、下層から倒壺型が出土する傾向があること、約1m下に砂礫層が広がることを確認した。24日に第1面の検出作業が終了し、溝状及び土坑状の焼土溜り（SS1～6）を確認し、順次、掘り下げを開始した。多量の製塩土器片が出土し、炉石と考えられる礫の集中箇所を確認した。6月12日に測量会社と今後の作業工程の打ち合わせを行い、15日にグリッド測量を実施することとなる。第1面検出遺構の平面図を作成し、下層の掘り下げに入った。第2面に相当する遺構面において、数条の溝、小穴、被熱粘土面を確認し、遺構掘削を順次行った。6月30日から数日間、雨が続いたことによる調査区内の冠水、調査区北側壁面の盛土崩落により、その復旧作業を行った。その後、遺構掘削を再開するが、雨により再度、壁面が崩落し、作業は遅滞した。7月7日からは遺構掘削と並行して、空中写真測量の準備に入った。7月11日には第2面を対象に空中写真測量を実施するが、天候不順により、雨の合間を見ての撮影となった。その後、雨が数日間続き、作業が遅滞するが、14日から下層の掘り下げ、第3面に相当する遺構面の検出作業を行った。18日に奥能登土木総合事務所、県教育委員会文化財課、埋蔵文化財センターにより、今後の撤収までの工程やそれに伴う調査区保全に係る管理移行の方法等を確認した。7月20日に遺構掘削を終了し、平面図作成を行った。その後、調査

区南側（山側）にトレンチを入れ、各層の山側の延びを確認した。7月24日に発掘器材を撤出し、現地調査を終了した。

第3節 出土品整理、報告書作成・刊行

出土品整理、報告書作成・刊行は県教育委員会文化財課の委託事業として、平成18～21年度にかけて、財団法人石川県埋蔵文化財センターが実施した。センター企画部整理課が担当し、平成18年度に出土品の洗浄、平成19年度に出土品の記名・分類・接合、土器の実測・トレース、遺構図トレースを実施する。平成20年度に調査部県関係事業調査グループが担当し、原稿執筆、図版作成、出土品の写真撮影を行い、平成21年度に報告書刊行に至る。

○調査体制（平成18年度）

| | |
|------|---|
| 調査期間 | 平成18年5月10日～同年7月24日（現地調査） |
| 調査主体 | （財）石川県埋蔵文化財センター（理事長 中西吉明） |
| 総括 | 前田憲治（専務理事） |
| 事務 | 山下淳映（事務局長） |
| 総務 | 宅崎仁芳（総務課長） |
| 経理 | 熊谷晋吾（経理課長） |
| 調査 | 谷内尾晋司（所長兼企画部長） 湯尻修平（調査部長） 藤田邦雄（調査第3課長） |
| 担当 | 土屋宣雄（調査第3課調査専門員） 宮川勝次（調査第3課主任主事） |
| 作業 | 庵谷内サコ、井ヶ谷一雄、石田三喜子、井下あさの、大兼政 信子、桶田 忠、笠谷勝治、重政美枝子、重政百合子、平 紀義、南 昭義、三野増雄、吉原 甲、朝光孝一、朝光ふみえ |

○整理体制（平成19年度）

| | |
|------|--|
| 調査期間 | 平成19年5月16日～同年9月14日 |
| 調査主体 | （財）石川県埋蔵文化財センター（理事長 中西吉明） |
| 総括 | 前田憲治（専務理事） |
| 事務 | 山下淳映（事務局長） |
| 総務 | 宅崎仁芳（総務課長） |
| 経理 | 熊谷晋吾（経理課長） |
| 整理 | 谷内尾晋司（所長兼企画部長） 加内光次郎（整理課長） |
| 担当 | 馬場正子（整理課主任技術員） 小岡博文（整理課主任技術員） 中尾望雄（整理課嘱託） |
| 作業 | 土屋宣雄（調査第3課調査専門員） 宮川勝次（調査第3課主任主事） 朝倉佳子、田中裕子、戸岡かがり |



表土除去作業



作業風景（第1面）



作業風景（第3面）



整理作業

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

大谷中学校東遺跡は石川県珠洲市馬繰町・大谷町地内に所在する。本県は北陸3県の中央に位置し、東は富山県・岐阜県、南は福井県に接し、北は能登半島として日本海に突出する。珠洲市（総面積247.20平方km、人口17,650人（平成22年現在））はその半島の先端部に位置し、西から南西にかけて輪島市、能登町（旧鳳至郡柳田村・能都町、旧珠洲郡内浦町）に接するほかは、三方が日本海に面する。日本海の北と東側を外浦、南側を内浦と呼称され、それぞれに海岸線の様相は異なる。外浦は山地が直接海岸線に迫り、北東端に所在する緑崎岬をはじめとして断崖地形をもった岩石海岸を特徴とし、内浦は富山湾を臨み、概ね幅の狭い砂丘を伴い、なだらかな海岸線からなる。人口の大部分はこの内浦側に集中する。

市域周辺の地形を概観すると、宝立山地、奥能登丘陵、海成段丘、沖積低地に大別でき、市域の大部分は北西部に広がる宝立山地とその東南側をとりまくように広がる奥能登丘陵が占める。宝立山地は宝立山（標高468m）から連なる標高300m未満の低山性の小起伏山地であり、奥能登丘陵は標高250m以下の丘陵地である。海成段丘は半島先端部から市南部の標高20～30mの内浦側に広がる第四紀更新世後期に形成された中段段丘とみられるものであり、低地は内浦の若山川、鶴飼川流域を中心にみられるが、山地、丘陵に比べて非常に分布割合は低い。

遺跡の所在する馬繰町は市北部に位置し、外浦に面する。町域の大部分は山地で占められ、西には烏川が北流する。東は海岸線に沿って当町を基点とする主要地方道大谷狼煙飯田線が隣町の高屋町を経由し、半島最先端の緑崎岬へと走り、また、隣町の大谷町を経て輪島市に至る国道249号が、烏川沿いで南に進路を変え、県指定史跡平時忠卿及び其の一族の墳や大谷則貞遺跡、そして、外浦と内浦をつなぐ交通の要衝である大谷峠を経て、内浦側の中心市街地飯田町へと走る。馬繰という地名の由来は不詳とされているが、「能登名跡志」に「惣じて此所馬繰村と云は、義経の馬を繋ぎ給ふよりの名」とある。中世には珠洲市域と能登町の一部（旧珠洲郡内浦町）に広く展開した若山荘を構成する一つとして、大谷浦とともに「西海浦」に属していたことが窺え、近世以降は珠洲郡西海村に属し、昭和29年市町村合併後は珠洲市馬繰町として現在に至る。また、揚浜塩田用の撒砂を運搬する際の労働歌「砂取節」（県指定無形民俗文化財）が今に伝わり、近世以降、製塩業の盛んな村であったことを物語るものである。現在、揚浜式製法で行なっている場所は外浦の一部の仁江海岸に限られている状況であるが、「すず塩田村」の体験型施設が平成18（2006）年にオープンし、伝統技法や人と塩の関わりを今に伝えている。

調査区は、町境付近に位置し、山地と海岸線の狭間の海岸段丘上に立地している。西側には大谷中学校が所在し、遺跡名称はこれに由来したものであり、昭和63（1988）年から実施された石川考古学研究会の生産遺跡分布調査において、製塩土器の散布地として知られていた。



第1図 遺跡の位置図

第2節 歴史的環境

遺跡周辺の状況であるが、地理的条件や開発の多寡によると思われるが、周知の遺跡は海岸沿いに集中しており、遺跡種も泉足跡平時忠卿及び其の一族の墳をはじめとする中・近世の墓地や製塩にかかわるものが多数を占める。製塩遺跡は石川考古学研究会の分布調査などにより確認された古墳時代以後の土器製塩にかかわるものが多く、当遺跡が位置する外浦に限らず、能登半島一円において多くの遺跡が確認されている。また、若狭湾や佐渡などととも日本海側有数の製塩地帯として認識され、珠洲市域においては現在のところ、34遺跡（第2図、第1表）が知られている。調査は昭和28（1953）年の岡山大学考古学研究室（近藤義郎教授）による三崎町森腰遺跡を先駆とし、粟津カンジヤバタケ遺跡、そして、市在住の中野鍊次郎氏を中心とする分布調査などにより、内浦側を中心とする分布状況が知られていた。その後、石川考古学研究会による分布調査において、製塩土器の散布地が多く確認され、遺跡数の増加、特に外浦側において顕著にみられ、分布状況も変化してきた。また、近年では内浦側に所在する三崎町宇治役場裏遺跡、宝立町鶴島遺跡・鶴島ツキザキ遺跡の発掘調査が実施され、外浦側においては、平成18（2006）年に当遺跡の調査が実施された。

土器製塩遺跡以外の周辺の遺跡（第3図、第2表）としては、当遺跡から東に約3kmの外浦に面した丘陵端部に磨製石斧などが採集された馬繰遺跡（28）が存在する。さらに東に約2kmの高屋町の丘陵斜面においては、縄文中期から後期にかけての土器、磨製石斧、石鏃などが採集された高屋小浦遺跡（32）が知られる。

中世の遺跡としては当遺跡から南西に3.5km内陸、内浦に開けた小支谷の最奥部に、珠洲窯跡の馬繰カメガタン窯跡群（24）が存在する。窯跡は外浦側に唯一確認されているものであり、13世紀後半から14世紀にかけて操業していたと考えられている。また、周辺では縄文土器や石器が採集（馬繰カメガタン遺跡（23））されている。大谷峠近くの谷部には大谷則貞遺跡（22）、中世の五輪塔群で構成する県指定史跡平時忠卿及び其の一族の墳（21）が存在する。大谷則貞遺跡は平成3（1991）年に石川県立埋蔵文化財センター、平成7・8（1995・1996）年に珠洲市教育委員会により調査が実施され、中・近世の建物跡や井戸跡、珠洲焼、青・白磁、肥前陶磁器などが確認されている。

大谷川流域に目をむけると、下流右岸に南北朝から室町時代の屋敷跡とされる日野家屋敷跡（3）、上流から下流域にかけては室町時代とされる外山大納言塚（9）をはじめとして、中世の墓地が点在し、五輪塔や宝篋印塔が数多く確認されている。また、外浦街道沿いにおいても、中・近世の墓地群が多数存在しており、五輪塔等が居並ぶ中世の景観を色濃く残す地域となっている。

参考文献

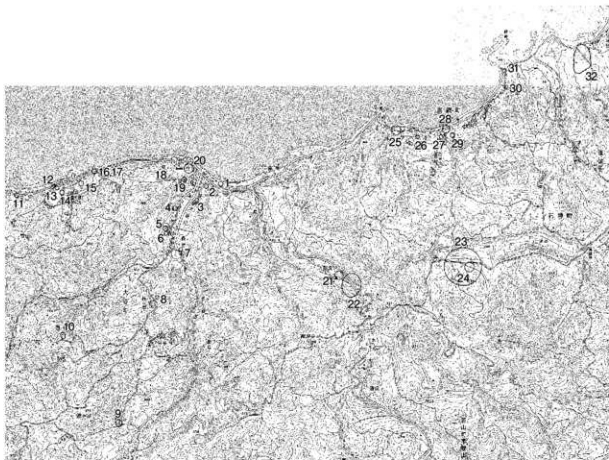
- 石川県教育委員会 1992 『石川県遺跡地図』
 石川考古学研究会 1993 「第1部 製塩遺跡の調査」『石川県内生産遺跡分布調査報告書』
 柿田祐司¹⁾ 2000 『珠洲市大谷則貞遺跡』石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター
 珠洲市史編纂専門委員会 1976 『珠洲市史 第一巻 資料編 自然・考古・古代』石川県珠洲市役所
 珠洲市史編纂専門委員会 1980 『珠洲市史 第六巻 通史・個別研究』石川県珠洲市役所
 珠洲市教育委員会 1997 『珠洲市大谷則貞遺跡（カミナヤチ、カンノウドウ）』
 珠洲市教育委員会 1999 『珠洲市遺跡地図』



第2図 珠洲市の製塩遺跡分布図 (S=1/200,000)

| 番号 | 軌道跡番号 | 市道跡番号 | 名称 | 所在地 | 立地 | 時代 | 出土品 | 備考 |
|----|-------|-------|--------------|--------------|------|----------------|--|---|
| 1 | | 05309 | 片石ソウラン遺跡 | 珠洲市片石町片石 | 海岸平野 | 古墳～平安 | 製塩土器(支脚・丸底、各少量) | |
| 2 | | 05210 | 片石白山神社前遺跡 | 珠洲市片石町片石 | 海岸平野 | 不詳 | 製塩土器(器型不詳、修繕片) | |
| 3 | | 05211 | 赤山内遺跡 | 珠洲市片石町赤山 | 海岸平野 | 不詳 | 製塩土器(器型不詳、修繕片)、土師器 | |
| 4 | | 05216 | 赤山東遺跡 | 珠洲市片石町赤山 | 海岸平野 | 不詳 | 製塩土器(器型不詳、修繕片)、土師器 | |
| 5 | 05048 | 05048 | 高野遺跡 | 珠洲市長崎町 | 段丘斜面 | 不詳 | 製塩土器 | |
| 6 | | 05217 | 長崎町遺跡 | 珠洲市長崎町長崎 | 海岸平野 | 不詳 | 製塩土器(器型不詳、修繕片)、土師器 | |
| 7 | | 05221 | 長崎入遺跡 | 珠洲市長崎町長崎 | 海岸平野 | 不詳 | 製塩土器(器型不詳、修繕片) | |
| 8 | | 05228 | 大谷中学校東遺跡 | 珠洲市大谷町大谷・高野町 | 海岸段丘 | 古墳中期～古代 | 製塩土器(矢尻、側器)、土師器、須恵器 | 1988年石川省古学研究会分布調査、2000年(財)石川県縄文文化財センター発掘調査 |
| 9 | | 05283 | 高野町遺跡 | 珠洲市長崎町高野 | 海岸段丘 | 不詳 | 製塩土器(器型不詳、修繕片)、珠洲焼 | |
| 10 | | 05289 | 高野新保遺跡 | 珠洲市長崎町新保 | 海岸段丘 | 古代～近世 | 製塩土器(器型不詳、修繕片)、土師器、珠洲焼、瓦片 | 高野町古神社跡跡地包括。製塩は高野町古神社遺跡(4期不詳) |
| 11 | | 05292 | 新江崎町南遺跡 | 珠洲市新江崎町 | 海岸平野 | 古墳後期～平安 | 製塩土器(矢尻・平底、各少量)、土師器、珠洲焼 | |
| 12 | | 05294 | 新江崎町東遺跡 | 珠洲市新江崎町 | 丘陵斜面 | 古墳(5世紀?) | 製塩土器(内輪)、土師器、須恵器、珠洲焼 | 崖面より採取 |
| 13 | | 05295 | 川邊崎崎遺跡 | 珠洲市川邊町 | 海岸平野 | 不詳 | 製塩土器(器型不詳、修繕片)、土師器、須恵器、珠洲焼 | |
| 14 | | 05296 | 川邊内遺跡 | 珠洲市川邊町 | 海岸平野 | 不詳 | 製塩土器(器型不詳、修繕片)、土師器 | |
| 15 | 05185 | 05185 | 横山遺跡 | 珠洲市横山町横山 | 海岸段丘 | 古墳後期? | 製塩土器(矢尻?)、土師器 | |
| 16 | | 05298 | 新保新保遺跡 | 珠洲市長崎町新保 | 海岸平野 | 古墳後期～平安 | 製塩土器 | |
| 17 | | 05277 | 宇野崎町三ツノイハツ遺跡 | 珠洲市三崎町宇野 | 平野 | 古墳後期 | 製塩土器 | |
| 18 | 05174 | 05174 | 粟津小学校南遺跡 | 珠洲市三崎町粟津 | 平野 | 古墳 | 製塩土器(矢尻)、土師器、須恵器 | |
| 19 | 05172 | 05172 | 粟津小学校北遺跡 | 珠洲市三崎町粟津 | 台地端 | 縄文・古墳、中世(古墳後期) | 須賀石器、石鏡、石棒、土師器、須恵器、製塩土器(矢尻) | 1991年珠洲市教育委員会調査、2003、2006年(財)石川県縄文文化財センター発掘調査 |
| 20 | 05171 | 05171 | 粟津ジャンパルク遺跡 | 珠洲市三崎町粟津 | 沖積扇 | 縄文・弥生、古墳、平安、中世 | 縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、製塩土器(矢尻、平底)、鏡石、珠洲焼、中世陶器(各少量) | 1975年珠洲市立総合博物館(旧発掘調査)、2003、04年(財)石川県縄文文化財センター発掘調査 |
| 21 | 05109 | 05109 | 森原遺跡 | 珠洲市三崎町森原 | 砂丘 | 古墳後期 | 製塩土器(矢尻) | 1959年岡山大学発掘調査 |
| 22 | 05108 | 05108 | 宇治佐藤家遺跡 | 珠洲市三崎町宇治 | 砂丘 | 古墳(～古代?) | 製塩土器(矢尻、平底?)、土師器 | 1997年石川県立縄文文化財センター発掘調査 |
| 23 | 05161 | 05161 | 高茂小嶋遺跡 | 珠洲市三崎町高茂 | 平野 | 古墳(～古代?) | 製塩土器(矢尻、平底)、土師器、須恵器 | |
| 24 | | 05274 | 高茂小嶋二遺跡 | 珠洲市三崎町高茂 | 海岸平野 | 古墳後期 | 製塩土器(矢尻、多量)、土師器、須恵器 | 発掘調査の可能性も |
| 25 | | 05272 | 高茂小嶋三遺跡 | 珠洲市三崎町高茂 | 海岸平野 | 古墳後期 | 製塩土器(矢尻、多量) | 高茂小嶋二遺跡の延長の可能性大 |
| 26 | 05100 | 05100 | 伏見遺跡 | 珠洲市三崎町伏見 | 平野 | 弥生・(古墳後期) | 土師器、製塩土器(矢尻) | 伏見c? |
| 27 | | 05271 | 伏見A遺跡 | 珠洲市三崎町伏見 | 海岸平野 | 不詳 | 製塩土器(矢尻、少量)、土師器 | |
| 28 | | 05270 | 伏見A遺跡 | 珠洲市三崎町伏見 | 海岸平野 | 古墳後期 | 製塩土器(矢尻、少量) | |
| 29 | 05136 | 05136 | 小浜八幡神社横遺跡 | 珠洲市三崎町小浜 | 古墳 | 土師器、製塩土器(矢尻) | | |
| 30 | 05136 | 05136 | 柳島跡 | 珠洲市柳島町 | 砂丘 | 古墳 | 製塩土器(矢尻) | 柳島三遺跡総括。1992、95年珠洲市教育委員会調査 |
| 31 | | 05305 | 正風川尻シオハマ遺跡 | 珠洲市正風町川尻 | 砂丘 | 不詳 | 製塩土器(器型不詳、修繕片)、土師器 | |
| 32 | | | 網島フナギ遺跡 | 珠洲市安永町網島 | 平野 | 古墳、平安、中世 | 製塩土器(矢尻、平底、須賀石鏡上)、土師器、須恵器、珠洲焼、土師器、白磁、銅鏡、瓦片、土師器(土製)、刀子、漆器、銅板(各少量) | 1994年珠洲市教育委員会調査、2000年(財)石川県縄文文化財センター発掘調査 |
| 33 | | | 網島遺跡 | 珠洲市安永町網島 | 平野 | 古墳、奈良、平安 | 製塩土器(矢尻、平底)、須賀石鏡上、珠洲焼、白磁、土師器、須恵器、中世陶器類、瓦片、金銅製品、土製品、木製品 | 2000年(財)石川県縄文文化財センター発掘調査 |
| 34 | 05041 | 05041 | 網島船倉のうて遺跡 | 珠洲市安永町網島 | 平野 | 古墳、奈良、平安 | 土師器、製塩土器(矢尻) | 1997年珠洲市教育委員会調査 |

第1表 珠洲市の製塩遺跡一覧表



第3図 周辺の遺跡 (S=1/50,000)

| 番号 | 県遺跡番号 | 市遺跡番号 | 名称 | 所在地 | 立地 | 時代 | 出土品 | 備考 |
|----|-------|-------|--------------|------------------|-------|------------|--|---|
| 1 | | 05228 | 大谷中学校東遺跡 | 珠洲市大谷町大谷 | 海岸段丘 | 古墳～古代 | 製塩土器 | |
| 2 | | 05227 | 旧熊野神社下遺跡 | 珠洲市大谷町 | 丘陵部 | 室町 | 珠洲、五輪帯・宝印暗模瓦 | |
| 3 | 05000 | 05050 | 日野家遺跡 | 珠洲市大谷町 | 平地 | 中世(南北朝～室町) | 五輪帯瓦、板碑 | |
| 4 | | 05226 | 鹿島山墓地 | 珠洲市大谷町 | 丘陵部 | 中世 | 五輪帯・宝印暗模瓦 | |
| 5 | | 05229 | 森吉家墓地 | 珠洲市大谷町森吉 | 山麓 | 中世 | 五輪帯瓦、板碑 | |
| 6 | | 05230 | 岡友家墓地 | 珠洲市大谷町森吉 | 台地 | 中世 | 珠洲、五輪帯瓦 | |
| 7 | | 05231 | 船光家墓地 | 珠洲市大谷町古ヶ谷 | 海岸段丘 | 中世 | 五輪帯瓦 | |
| 8 | | 05232 | 船ヶ平墓地 | 珠洲市大谷町古ヶ平 | 丘陵 | 中世 | 珠洲、五輪帯瓦 | |
| 9 | 05006 | 05056 | 外山大崎古屋 | 珠洲市大谷町外山 | 山麓 | 中世(室町初期) | 五輪帯 | |
| 10 | | 05233 | 大谷西行墓地 | 珠洲市大谷町西行 | 丘陵 | 中世 | 珠洲(遺物部)、五輪帯瓦 | |
| 11 | 05048 | 05048 | 船輪遺跡 | 珠洲市長輪町 | 段丘斜面 | 不詳 | 製塩土器 | |
| 12 | | 05217 | 長輪日遺跡 | 珠洲市長輪町長輪 | 海岸平野 | 不詳 | 製塩土器、土師器 | |
| 13 | | 05218 | 長輪西墓地 | 珠洲市長輪町 | 丘陵部 | 中世 | 五輪帯瓦 | |
| 14 | | 05219 | 曹藤寺墓地 | 珠洲市長輪町 | 台地 | 中世～近世 | 板碑、墓碑 | |
| 15 | | 05220 | 東家墓地 | 珠洲市長輪町 | 丘陵斜面 | 中世 | 五輪帯・宝印暗模瓦 | |
| 16 | | 05221 | 長輪入遺跡 | 珠洲市長輪町長輪 | 海岸平野 | 不詳 | 製塩土器 | |
| 17 | | 05222 | 末光家墓地 | 珠洲市長輪町 | 平地 | 中世～近世 | 五輪帯瓦 | |
| 18 | | 05224 | 上浜墓地 | 珠洲市大谷町 | 丘陵 | 不詳 | 五輪帯瓦 | |
| 19 | | 05225 | 御妻墓地 | 珠洲市大谷町大町 | 丘陵 | 中世～近世 | 五輪帯瓦 | |
| 20 | 05049 | 05049 | 大谷海日遺跡 | 珠洲市大谷町 | 丘陵部 | 古墳 | 石葺、石積 | |
| 21 | 05051 | 05051 | 平持宗廟及び其の一長之坊 | 珠洲市大谷町間貝 | 丘陵 | 中世(鎌倉) | 五輪帯 | 形跡定跡。1997年珠洲市教委発掘調査。 |
| 22 | 05052 | 05052 | 大谷間貝遺跡 | 珠洲市大谷町間貝 | 丘陵、谷部 | 縄文、中世、近世 | 珠洲(遺物・発掘)、土師器、土師、白磁、長頸瓶、古平陶磁器、石製土、石製土、瓦葺 | 1981年石川県立歴史文化財センター発掘調査。1995、96年珠洲市教委発掘調査。 |
| 23 | 05053 | 05053 | 高橋カマヤシ遺跡 | 珠洲市長輪町 | 山麓 | 縄文 | 土師、石葺 | |
| 24 | 05054 | 05054 | 長尾池ヶ谷遺跡 | 珠洲市長輪町 | 山地斜面 | 中世(鎌倉～南北朝) | 珠洲地 | 1963年石川考古学研究会調査。 |
| 25 | | 05203 | 高橋日遺跡 | 珠洲市長輪町 | 海岸段丘 | 不詳 | 製塩土器、珠洲 | |
| 26 | | 05284 | 高橋白山神社横遺跡 | 珠洲市珠洲市高橋町 西表山 | 平地 | 中世 | 五輪帯瓦 | |
| 27 | | 05285 | 志久屋家墓地 | 珠洲市長輪町志久屋山 | 丘陵 | 中世 | 五輪帯瓦、珠洲 | |
| 28 | 05180 | 05180 | 高橋遺跡 | 珠洲市長輪町 | 台地部 | 縄文 | 磨製石斧、石錘 | 発掘出土 |
| 29 | | 05286 | 守輪池墓地 | 珠洲市長輪町南出 | 丘陵 | 中世～近世 | 五輪帯瓦、宝印暗模瓦 | |
| 30 | | 05287 | 安養家墓地 | 珠洲市長輪町船輪 | 丘陵 | 中世 | 五輪帯・宝印暗模瓦 | |
| 31 | | 05288 | 下馬家墓地 | 珠洲市長輪町船輪 | 平地 | 室町 | 珠洲(遺物部)、瓦葺、火事堂 | 1995年珠洲市教委発掘調査 |
| 32 | 05181 | 05181 | 高屋小浜出遺跡 | 珠洲市高屋町小浜出 | 丘陵斜面 | 縄文、古墳 | 土師中・長頸瓶、石葺、磨製石斧、石製石斧、石葺、石葺、石葺、石葺 | |

第2表 周辺の遺跡地名表

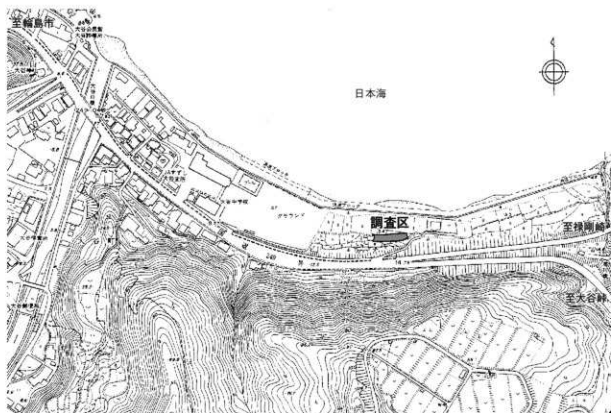
第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

調査区は一般国道249号（大谷道路）改築工事の路線内に東西約45m、南北約10mの範囲で設定し、面積1.150㎡（3面調査の総計）を対象とする。調査区南側は国道249号と主要地方道大谷狼煙飯田線が走り、北側は日本海（外浦）に面する。東・西両側は水田及び畑地が広がり、100m西方に大谷中学校が位置する。

調査区区割りは諸般の事情により、当初、調査区西端を基点とし、センターラインを通る10mグリッドを任意に設定し、調査を開始した。その後、任意グリッドを基本に業者によるグリッド測量を実施した。結果的に、調査区がほぼ東西方向に向いていたことから、調査に支障をきたすほどの相違は幸いにもなかった。調査区区割りは公共座標を基準に10m間隔のグリッドを設定し、南西交点を基準に南から北方向へはアルファベットA・B、西から東方向へは数字1～6と表記した。なお、調査区は公共座標 $X=166344\sim 166364$ 、 $Y=1065\sim 1125$ が対象となる。

調査区域一帯は南方に広がる宝立山地から日本海（北側）へとつながる斜面を削平し造成され、階段状に水田及び畑地として利用されている。仮に海岸線近くから国道249号を直線的に結ぶ約60mをみると、海岸線近くで標高約4.5m、調査区域で約7.8m、南側を走る国道249号地点では標高約14mと高低差約10mを測る。今回の調査では、製塩関連遺構を中心に3面の遺構面を検出し、標高は4.9～6.0mを測る。また、やや緩やかな傾斜を持ちながらも、平坦面を造成し、作業面を設けていたことが認められた。



第4図 調査区位置図 (S=1/5,000)

第2節 基本層序（第5～7図）

調査区は南（山側）から北（海側）へと緩やかに傾斜する地形であり、東部北側及び北端部は傾斜変換点として一段低くなる状況である。これは耕作地利用に際して斜面地を階段状に造成した影響が多分にあると考えられ、表土を取り除くと、調査区北側では砂礫層がみられ、調査区の南側の丘陵に向っては灰色系粘土層の広がりが確認された。

層序は基本的には2・4・5区にそれぞれ設定した南北トレンチ3箇所（トレンチ①～③）にて確認した。また、A2・4区に拡張トレンチ（トレンチ④・⑤）を設定し、各層の山側への伸びを確認した。各トレンチの細部を観察するとそれぞれに相違は認められるが、基本的には下記6層に大別できる。

I層 灰褐（黄）色粘質土（粘土層=上面：粘土面①）

II層 淡青灰色粘質土（粘土層=上面：粘土面②、下面：粘土面③）=上面：第1面

III層 赤褐色粘質土（焼土層）
IV層 黒灰色粘質土（炭層）

} 第1面

V層 淡（黄）灰色粘質土（粘土層）=上面：第2面

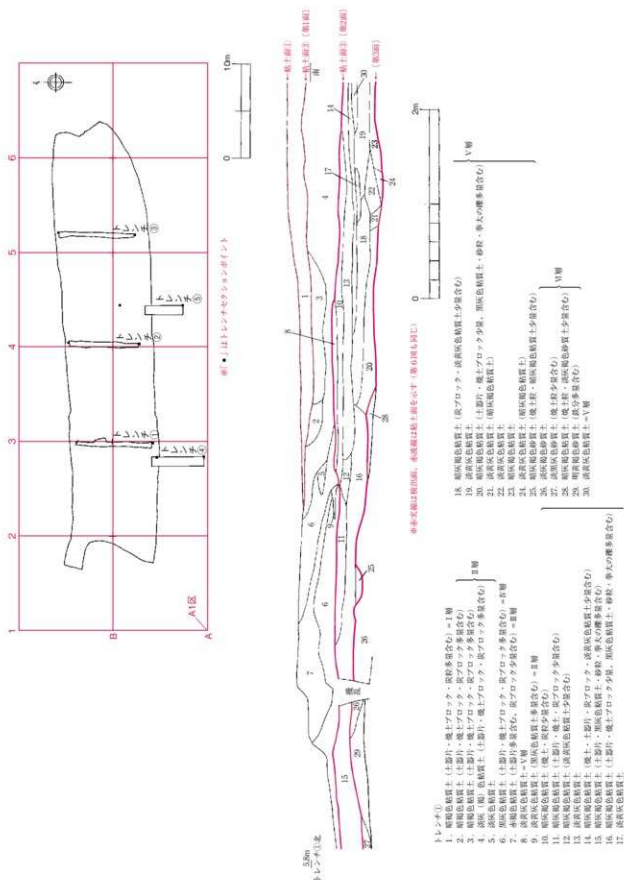
VI層 淡褐色砂質土（砂層）=上面：第3面

I層は表土除去した段階で、調査区南半部に確認できた第1面に相当する層であり、焼土ブロックや炭粒、土器の小片が若干混じる。2～6区にかけて広がりをみせるが、3区東部から4区西部にかけての一部区間では、淡灰褐色及び淡灰黄褐色のシルト質土（トレンチ②1～4層）が北半部にまで入り込んでいる状況である。次のII層は淡青灰色粘質土（トレンチ②8～11・23層）が淡黒灰色シルト質土（トレンチ②32層）と互層状態に厚く堆積しており、2～3区西部、4区東部～6区ではこのような細かい単位ではないものの、いずれも粘土層の堆積が確認され、比較的しまりのある土質である。この上面をもって第1面の検出面とした。I・II層が広がりをみせる南半部に対し、北半部ではIII層の焼土層、IV層の炭層が確認でき、焼土・土器溜り等を検出した。このII・III層の堆積は、トレンチ①の7・6層にみられるように斜め堆積等安定した状況を示すものではなく二次的移動等再堆積の可能性が高いものである。ただし、北半部においても粘土面（トレンチ②9～11・23層の上面、トレンチ③7層の上面）が確認される箇所ではその影響を受けていない状況も看取され遺構（被熱跡を認める礫集中・SK2等）を確認している。

第1面に対応するI～IV層土は厚いところで0.6m程度を測り、これを掘り下げてV層をベースとする第2面に至る。V層は南側丘陵地における粘土層を作業面の整地に利用したと考えられ、調査区中央付近では北側に向うほど途切れ、黒灰色砂質土をベースとするものとなり、全面的に広がりをみせるものではない。ここでは、区画溝群を中心に炉跡（焼土）等の遺構が検出され、棒状脚尖底を主体に多量の製塩土器が認められる。

VI層は基本的には基盤層である淡褐色砂質土を主体に、礫が混じっているものであり、第3面の検出面に対応し、炉跡、土坑や小穴などを検出した。

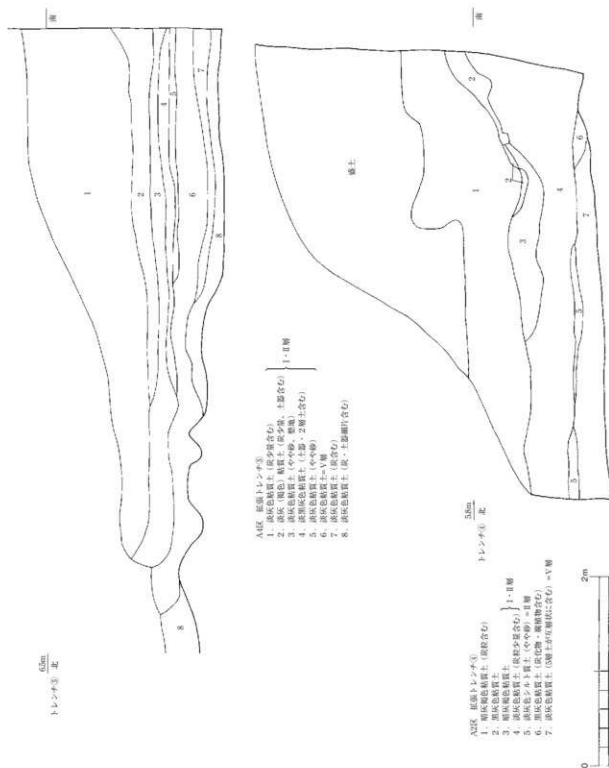
なお、第1面に至る上層部は、調査前の段階で丘陵から切り出した土砂が厚く集積されていたため、表土部分及び地形の現状を確認することが困難であったことから、試掘調査のデータを基にすると、調査区西部が表土・客土0.4～0.6m、東部が0.7m、中央部南端が0.8m堆積しており、それを除去すると第1面に至るといふ状況であった。



第5図 調査区区分割図・トレンチ位置図、トレンチ①土層断面図 (S=1/400、40)



第6図 トレンチ②・③土層断面図 (S=1/40)



第7図 トレンチ④・⑤土層断面図 (S=1/40)

A2・4区の丘陵側に設定した拡張トレンチ④・⑤の層位関係は、A2区のトレンチ④がトレンチ①、A4区のトレンチ⑤がトレンチ②を基にして概観する。まず初めに、トレンチ④では、1層が表土・客土に対応し、3・4層がトレンチ①（以下、省略）1～4層＝I・II層、5層が13層＝II層、7層が15層以下砂礫層上面＝V層、トレンチ⑤は1～5層がトレンチ②（以下、省略）1～4・23・32層＝I・II層、6層が27層＝V層と対応する関係にあると考えられる。

以上のことから、検出面の第1面上面から第2面に至る間では、①I層上面にて粘土面（粘土面①）が確認される段階（第1面上面相当）、②II層による粘土面（粘土面②）とIII・IV層に対応する焼土や土器溜り等の遺構が確認される段階（第1面）、③II層による粘土層形成の初期段階（粘土面③）ただし、その上面での単位認定が困難なことから下面を捉える（検出面は第1から2面上面相当）ものがみられ、第2面では、V層をベースとし焼土や区画溝などを中心とする遺構が確認されており、第3面では、VI層をベースとし炉跡・土坑や小穴等の遺構が確認される状況がみられた。

第3節 遺 構

1. 概 要

古墳時代中期から平安時代以降にかけての製塩関連遺構を中心に3面の検出面で調査を実施しており、現地調査時に番号をつけたもので、SS（土器溜り遺構・地点及び炉）19基、SK（土坑）10基、P（小穴）68基、SD（溝）15条、SX（落込み）4基、礫集中4箇所を数える。各面ごとの概要は以下の通りである。

【第1面】粘土面①～③（第8図）

〔①段階〕（第1面上面）粘土面①

検出面は本調査区の最上面にあたるもので標高は5.5～6.1mを測り、北側にむけて緩やかに傾斜する。検出遺構は淡灰褐色シルト質土（トレンチ②1層）等による粘土面（粘土面①）である。

〔②段階〕（第1面）粘土面②、SS1～4・6（礫集中4）、SK1～2、P1～3、SD1

検出面は標高5.5～6mを測り、北側にむけて緩やかに傾斜する。検出遺構は淡青灰色粘質土（トレンチ②23層）等による粘土面②と2～6区にかけて溝状及び土坑のSS1～4・6、SK2を確認し、その内部から被熱跡の認められる礫群（礫集中）を検出した。

〔③段階〕（第1面～2面上面）粘土面③

検出面の標高は5.4～5.5mを測り、淡青灰色粘質土（トレンチ②23層）等による粘土層の下面（粘土面③）で、以後の粘土層形成における初段階のものを捉えている。

【第2面】区画溝等を伴う炉跡、SS5・8～19、SK3～7、P4～21・27・28・34～58、SD2～13（第9図）

検出面は標高4.9～5.4mを測り、北側にむけて緩やかに傾斜する。検出遺構は3・4区を中心に、区画溝等を伴う被熱粘土面で構成する炉跡、焼土溜り、小穴群を確認し、製塩土器を多量に出土している。調査区東西両側の2・5区において、遺構は希薄となり、5区でSS9～12の浅い焼土溜り、北側にむけて緩やかに傾斜し、一段落ち込む地形上に黒灰色粘質土の浅い堆積層を確認したに過ぎない。なお、4区の最上面において土器溜りSS5を確認している。

【第3面】SK9～11、SD14・15、P22～26・29～33・59～68、SX1～4（第9図）

検出面は4.8～5.3mを測る。検出遺構は2～3区を中心に、土坑、小穴、溝、浅い落込みを確認した。2区では被熱面が認められるSX3、土師器甕が出土したP32・33の他は、不規則形の落込みの

SX1・2・4・5が大部分を占める。これらは深さ5cm前後を測り、暗灰色粘質土を埋土とする遺構である。3～4区西部にかけては土坑、小穴、溝を、4区以東は一部に落ち込み状の遺構を確認した。

以下に、粘土面からSSなどの順に主要なものを報告するが、調査区中央部において第2面で検出した区画溝等を伴う遺構群は一括して説明する。

2. 粘土面①～③ (第5・6・8図)

粘土面は、第2面で活動が終了後、南側丘陵土の切土等による黄(青)灰色系粘質土により整地されたもので、最大厚0.6m程度を測る。検出範囲は初期段階にあたる粘土層下面の粘土面③から最上層の粘土面①に向かって北(海)側に若干広がるもので、さらに北側に向かって僅かに傾斜する。粘土面③は標高5.4～5.5m程度で検出され、東西幅約44m、南北幅は中央部で北側に張り出す様相を呈しており、西側のトレンチ①・④で約9m、中央部のトレンチ②・⑤で約11m、東側のトレンチ③で約3.5mと確認され、さらに丘陵側へと延びることから地形的にみて後背傾斜地裾辺りまでと思われ、トレンチ④南端より3m程度南へ向うと考えられる。調査区内で確認された面積は約175㎡である。

次にトレンチ②でみられるような厚さ0.02、0.03mを測る淡黒灰色シルト質土と黄(青)灰色系粘質土による互層の整地状況が細かい単位で複数ありその上面を粘土面②として捉えた。検出面は標高5.5～6m(厚さ0.1～0.5m)を測り、検出範囲は粘土面③とほぼ同じである。この粘土面②の北側では、土坑や焼土・土器溜り等を検出しており火処の存在も窺われる。さらに上面の標高5.5～6.1m(厚さ0.05～0.2m)で検出されるのが、粘土面①で、検出範囲はトレンチ①・③において前段階より北側に1m程度拡張しているが、トレンチ④では南側丘陵土に向かって傾斜が上がっていくことからその変換点あたりまでと捉えることができその場合トレンチ④南端より1.5m北側が南端となる可能性も考えられる。また、中央部北側の張り出し辺りでは2m程度南側に後退しているが、焼土層の上に粘土面①が覆うことから、北側については削平等の影響も考えられる。調査区内で確認された面積は約180㎡である。これらの粘土層は、第2面で確認された土器製塩の後に人工的に整地されたことと、粘土面②の北側で検出された焼土や被熱跡のある礫等といった火処跡が認められること等から、製塩作業に係る造成基盤と認めると、その性格は揚浜式製塩法の塗塩塩田に比定できるものと考えられる。その場合、調査区中央部で北側に張り出す点については塩田の区画を示すものとも考えられる。なお、これらの粘土層には焼土・炭粒・土器細片等を微量に含むが時期を特定できるような遺物の出土は認められなかった。

3. SS1 (第10図)

B2区に位置する。第1面検出遺構。検出面は標高5.5～5.7mを測り、北方に向けた緩斜面に立地する。規模は東西4.5m(最大幅)、南北2.2m、深さ0.2mを測り、平面形は北側に開口する半円形である。埋土は製塩土器が多量に入る赤褐色粘質土の単層である。埋土には少量の礫が入るが、被熱跡が認められず、周囲に広がる自然礫が混入した可能性があることから、土器一括廃棄された箇所の可能性が高い。遺物は棒状脚平底を主体とする製塩土器が多量に出土しており、重量にして約6.7kgを測る。第20図1～4を図化した。

4. SS2 (第12図)

A・B3区に位置する。第1面検出遺構。検出面は5.5～6.0mを測り、北方に向けた緩斜面に立地する。規模は東西6.2m、南北3.2m、深さ0.05～0.13mを測り、平面形は不整形である。埋土は製塩土器が多量に入る赤褐色粘質土、焼土と土器片が多量に入る黒灰色粘質土が互層状態に堆積しており、南部は粘土層である灰褐色粘質土(6・14・15層土)を、北部は黒灰色粘質土(18層土)をベースと

する。また、南部から中央部にかけては2段の平坦面が設けられ、階段状に北側に向けて低くなっている。土坑西半部を中心に多量の礫がみられ、10～30cmを測る被熱跡が認められるものが多い。南部及び北端部に位置するものはそれぞれベースである灰褐色粘質土、黒灰色粘質土につくものが多いことから、原位置を保っている可能性が高いが、中央部のものはベースからは浮いた状態であり、赤褐色粘質土に混じるものが多いことから、1～12層土は廃棄層としての性格が強いと考えられる。遺物は棒状脚実底を主体とする多量の製塩土器、須恵器が出土しており、製塩土器は重量約94kg、個体数(棒状脚実底脚部)が433点にのぼり、他の遺構に比べても圧倒的に多い。第20・21図5～31を図化した。なお、SS2の下層には、第2面で検出した弧状を呈する溝群、焼土面が存在する。また、諸般の事情により、平面図等の記録はとれていないが、SS2下の焼土層をSS7(重量約3.7kg)として遺物の取り上げを行い、そのうち第22図50を図化した。

5. SS3・SK2 (第10・11図)

A・B4～6区に位置する。第1面検出遺構。検出面は標高5.5～6.0mを測り、北に向けて緩やかに傾斜する。規模は長さ16m、幅1.0～2.7m、深さ0.05～0.2mを測り、平面形が東西方向に延びる溝状の遺構である。埋土は焼土に土器片、黒灰色粘質土が少量混じる。溝内部には10～20cm程の被熱跡のある礫が多量に認められ、これらは4箇所(調査時に礫集中箇所として1～4をつける)程のまとまりをもって帯状に広がりを見せる。また、溝西部に位置する礫群にはそれに沿うようにして硬くしまった焼土等が広がる。連続的に炬を構築した結果、東西に広がる溝状の形態をとったものであり、その際、汀線を意識したと考えられ、それと方向が符合する。溝東部に位置するSK2は南北0.76～1.30m、東西1.96m、深さ0.34mを測り、平面形は東部がふくらみを持つ隅丸方形である。トレンチ③の7層土(白灰褐色粘質土)上面にて検出した遺構であり、土坑西部にその粘質土及び被熱跡のある礫及び珪藻土が認められる。埋土は2～4層土が対応し、黒灰色粘質土が主体となり、焼土ブロック、粘土ブロック、炭が多量に混じる。また、被熱跡のある礫及び珪藻土が土坑壁を回るように位置する。なお、1・5層土はSS3の浅い溝状遺構埋土に対応し、北部にかけては黒灰色粘質土が薄く堆積しながら落ち込んでいる。遺物はSS3及びSK2ともに棒状脚実底を主体とする製塩土器が多量に出土しており、重量にして約8.4kgを測る。そのうち第21・22図32・33・58・59を図化した。32・33はSS3の浅い焼土層、58・59はSK2から出土した。

6. SS4 (第10図)

B4区に位置する。第1面検出遺構。検出面は標高5.5～5.7mを測り、北に向けて緩やかに傾斜する。規模は東西1.26m、南北0.74m、深さ0.06～0.1mを測り、平面形は不整形である。遺物は製塩土器片が少量出土しており、重量にして約0.5kgを測る。そのうち第21図34・35を図化した。

7. SS6 (第10図)

B4区に位置する。第1面検出遺構。検出面は標高5.5～5.7mを測り、北に向けて緩やかに傾斜する。約3m四方の範囲に礫群、焼土及び土器溜まりの集中域が認められる。A地点で東西1.20m、南北0.52mの長楕円内部に塊状の製塩土器が多量にみられ、全体的に鉄分を帯び硬くしまっており、特にB地点との境に位置する礫下が顕著である。礫は縦74cm、横52cmを測る楕円形であり、扁平な面が上を向いた状態で確認され、被熱跡がみられる。B地点では黒灰色粘質土面に20～40cm程の被熱跡の礫が集中し、その礫下を中心に製塩土器片がみられる。製塩土器片は他の地点に比べ全体的に少量であるが、礫下にみられる破片は大きい。C地点では20cm程を測る台形状の礫が、やや平坦な側面を上に向け、三角部分を地中に埋めた状態で確認された。その礫を中心として15～30cm周りに黄褐色粘質土が回る。C地点から北・東西方向には製塩土器片、黒灰色粘質土、黄褐色粘質土が混在する範囲が

認められる。遺物は棒状脚尖底を主体とする多量の製塩土器や須恵器片が出土しており、製塩土器は重量約10.8kgを測る。そのうち第21図46～49を図化した。46・48・49はA地点、47はB地点から出土した。また、その下層掘り下げの際、第2面に至る間層であるトレンチ②の23層土上面においても溝状（東西方向）に焼土層と黒灰色粘質土（炭層）が延び、その内部に礫群が認められる（第11図）。

8. S S 5（第12図）

A・B3区に位置する。第2面（上面）検出遺構。検出面は標高5.6mを測る。長軸2.68m、短軸2.02m、深さ0.12～0.26mを測り、平面形は楕円形である。トレンチ②の7層土（黒灰色粘質土）上面に検出した遺構である。埋土は赤褐色粘質土の単層である。土器の廃棄層としての性格が強いと考えられる。遺物は棒状脚尖底を主体とする製塩土器が多量に出土しており、重量約18kg、個体数（脚部）約150点にのぼり、S S 2に次ぐ出土量である。そのうち第21図36～45を図化した。

9. S S 11（第13図）

B5区に位置する。第2面検出遺構。検出面は標高4.6mを測る。埋土は製塩土器が入る赤褐色粘質土の単層であり、黒灰色粘質土が多量に混じる。遺物は棒状脚尖底を主体とする製塩土器が少量出土しており、重量約0.6kgを測る。

10. S S 12（第13図）

B6区に位置する。第2面検出遺構。検出面は標高4.6mを測る。埋土は赤褐色粘質土、下層に黒灰色粘質土となる。製塩土器小片が極少量出土している。

11. S S 15（第13図）

B4・5区に位置する。第2面検出遺構。検出面は標高5.2～5.3mを測り、北に向けて緩やかに傾斜する。最大長2.2m、最大幅0.9m、深さ0.05m未満の浅い焼土溜りである。S K 3上面で検出し、3層土（黒灰色粘質土）の上位に位置する。遺物は棒状脚尖底を主体とする製塩土器が少量出土しており、重量約2.2kgを測る。

12. S S 18（第13図）

B5区に位置する。第2面検出遺構。検出面は標高5.1mを測る。東西0.96m、南北0.88m、深さ0.06～0.1mを測る。埋土は灰褐色粘質土の単層であり、焼土と製塩土器片が混じる。S K 3の掘り下げ後、底面で検出した遺構である。遺物は棒状脚尖底を主体とする製塩土器が出土しており、倒盃型も少量混じる。重量約2.3kgを測る。

13. S S 19（第13図）

B4区に位置する。第2面検出遺構。検出面は標高5.1mを測る。規模、平面形は不明であるが、深さは0.14m（断面図から）を測る。埋土は褐色粘質土の単層であり、焼土と製塩土器片が混じる。遺物は棒状脚尖底を主体とする製塩土器が極少量出土しており、重量約1kgを測る。

14. 区画溝等の遺構群（第15・16図）

A・B3・4区に位置する。第2面検出遺構。検出面は標高5.3～5.4mを測る。被熱跡のある平坦面を弧状及び「コ」字状の溝によって区画された製塩炉跡である。ここでは関連する遺構を一括して報告する。

東西16m、南北6m以上の範囲に溝9条、土坑2基、小穴多数、焼土及び土器溜り、被熱面を確認した。弧状に回る溝は山側で2条確認でき、そのうちS D 8は幅0.4～0.6m、深さ0.1～0.17mを測り、東半部を西方から北方にかけて回る。埋土は1層土が北方に向かう浅い溝に対応し、2～4層土が西方へ向かう深い溝に対応する。また、砂質が強く、焼土及び製塩土器が混入する。その内側の西半部に東方から北方にかけて回る溝が位置し、これは東部をS D 7、西部をS D 9と番号を付けている

が、調査段階で埋土の違いから分けてあるものであり、同一溝の可能性も残す。SD7はトレンチ②より東部は溝の形態は薄れ、幅広の浅いものとなっている。両溝ともに、深さ0.15m前後を測るが、幅はSD9の方が狭い。埋土は両溝ともに黒灰色粘質土を主体とするが、SD7は製塩土器片、焼土ブロックが多量に混じり、赤味が激しい。それに対し、SD9は上層に多量の炭、下層には周りで認められる白灰色粘質土ブロックが混じり、製塩土器片の混入は少なく、SD8とは埋土の様相が異なる。

弧状溝の内部で、北側に開口する「コ」字状の溝(SD10~12)を中央部より西側において確認した。溝は東西5.3m、南北2.8m以上の範囲に東西方向に連続した形で確認でき、幅0.22~0.34m、深さ0.1m前後を測る。SD10とSD11で区画する内部は東西2.4mを測る。内部には被熱粘土面が確認でき、南西部からSD10(南北方向)を越えて広がる。また、中央部北側には東西0.88m、南北1.14m、深さ0.3mを測り、平面形が不整形円形を呈するSK7が位置し、埋土は黒灰色粘質土である。東側のSD10とSD12で区画される内部は東西1.6mを測る。内部に被熱面は認められない。両区画ともに、被熱面の範囲以外は明確な粘土貼り付け面を確認はできていないが、断面観察から、上位の黒灰色粘質土を掘り下げると、区画内は暗灰色もしくは淡灰色粘質土が認められるのに対し、区画外は下層の礫層まで黒灰色粘質土が堆積している違いはある。東側区画の内部には南北方向に走る溝(SD3)が確認でき、これは東方にL字状に曲がり、SD4につながる可能性があるもので、SD10の前段階の区画溝の可能性もある。

溝の性格としてはSD7~9の弧状溝が山側からの流水を防ぐ、排水溝として機能していた可能性があり、東西方向に走るSD5・6・13等は区画溝としての性格を持つと考えられる。また、1面で確認した礫及び珪藻土による炉跡に対し、2面では小穴、溝などに礫が存在するが、目立って被熱のあるものが確認できず、区画溝を伴うことなど炉の形態が異なっている。これらの溝からは棒状脚尖底を主体とする製塩土器が出土しており、なかでもSD8が目立って多い。そのうちSD8出土の第24図83~87、SD9出土の第24図88を図化した。

SD7と9の接点南部にSS16、SD7東部にはSS8・13・17、SD6東部にはSS14の浅い焼土溜りが存在する。これらの埋土は製塩土器小片が混じる赤褐色を呈し、総じて土質はしまる。層位では溝、ビットなどの上位にくるものであり、SS8は東西2.10m、南北1.54m、深さ0.05mを測り、平面形は隅丸方形である。内部には約10~20cmを測る礫が数個体、散在する。SS13はSS8に南接し、不規則なL字状を呈する。SS14はSS8の北部に位置し、東西1.16m、南北1.22mを測る。SS16は約3m四方の範囲に広がり、SD7に切られる。SS17はSS13の南部に広がりをもつ。また、SS13・14・16・17は、棒状脚尖底脚部が比較的良好に出土しており、重量にして約2~4.5kgを測る。そのうち、SS13出土の第22図51~53、SS16の第22図54~56、SS17の第22図57を図化した。

4区西部を中心に多数の小穴群が存在しており、大部分のものは埋土が黒灰色粘質土を主体とし、棒状脚尖底を中心とする製塩土器が少量出土している。P48・49は深さ0.6~0.65mを測り、その内部には人頭(子供)大の礫と多量のやわらかい粘土が認められる特徴をもち、製塩土器の口縁部及び体部片が極少量出土している。

15. SK3 (第13・14図)

B4・5区に位置する。第2面検出遺構。検出面は標高4.9~5.3mを測り、北に向けて傾斜する。平面形は東部から北西方向にややL字状に曲がる不整形な溝状を呈する。埋土は黒灰色粘質土の単層である。内部には焼土溜りであるSS15・18・19が位置する。遺物は棒状脚尖底を主体とする製塩土

器や須臾器が出土しており、製塩土器は重量約5kgを測る。そのうち第23図62～70を図化した。

16. SK4 (第6・15図)

A・B3・4区に位置する。第2面検出遺構。SD7の下面で検出した。東西2.04m、南北0.8m、深さ0.26mを測り、平面形は隅丸長方形である。埋土は黒灰褐色粘質土であり、炭粒・焼土粒が少量混じる。また、約5cmを測る礫が多量に入る。遺物は製塩土器片が少量出土しており、そのうち第22図60を図化した。

17. SK5 (第15図)

B4区に位置する。第2面検出遺構。検出面は標高5.3mを測る。東西2.9m以上、深さ0.17～0.37mを測る溝状の遺構であり、北部は調査区外に延びるものと推定できる。遺物は製塩土器片が少量出土しており、そのうち第22図61を図化した。

18. SK9 (第18図)

B3区に位置する。第3面検出遺構。検出面は標高5.2mを測る。東西0.86m、南北1.2m、深さ0.16～0.3mを測り、平面形は隅丸方形である。埋土は暗灰色粘質土の単層である。遺物は倒壺型を主体とする製塩土器や土師器が少量出土しており、そのうち第23図71～74を図化した。

19. SK11 (第18図)

B4区に位置する。第3面検出遺構。検出面は標高5.2mを測る。東西2.4m、深さ0.05～0.1mを測る。南部は第3面の地山に対応する砂層が希薄になっていたためであろうか、検出面を認識できず、地山の下層に至る。さらに南部はトレンチ⑤の6層に対応すると考えられる淡灰色粘質土が広がる。遺物は倒壺型を主体とする製塩土器や土師器が少量出土しており、そのうち第23図75を図化した。

20. SX3 (第17図)

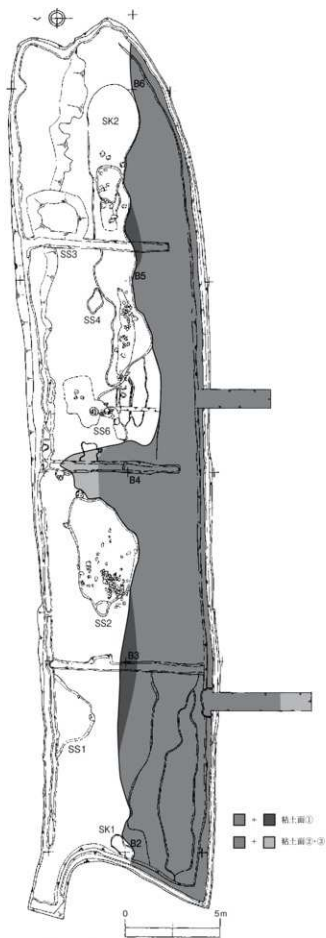
B2区に位置する。第3面検出遺構。検出面は標高5.3mを測る。東西6m、南北1.74～2.82m、深さ0.05mを測り、平面形は中央部が狭まる不整隅丸方形を呈する。遺構内部に2箇所の落込みを検出した。北部に位置するものは、東西2.88m、南北1.1m、深さ0.1～0.15mを測り、平面形が東西に長い隅丸方形を呈する。埋土は暗灰色粘質土であり、遺構内部に炭が密集する小穴が確認でき、深さ0.05mを測る。南に位置するものは、東西1.9m、南北1.32m、深さ0.06～0.2mを測り、平面形は北東部がやや膨らむ隅丸方形である。遺構中央部は小穴として一段落ち込む。また、小穴内部から西部にかけて被熱跡が認められる。遺物は倒壺型を主体とする製塩土器や土師器が少量出土しており、そのうち第23図79～82を図化した。

21. P32・33 (第17図)

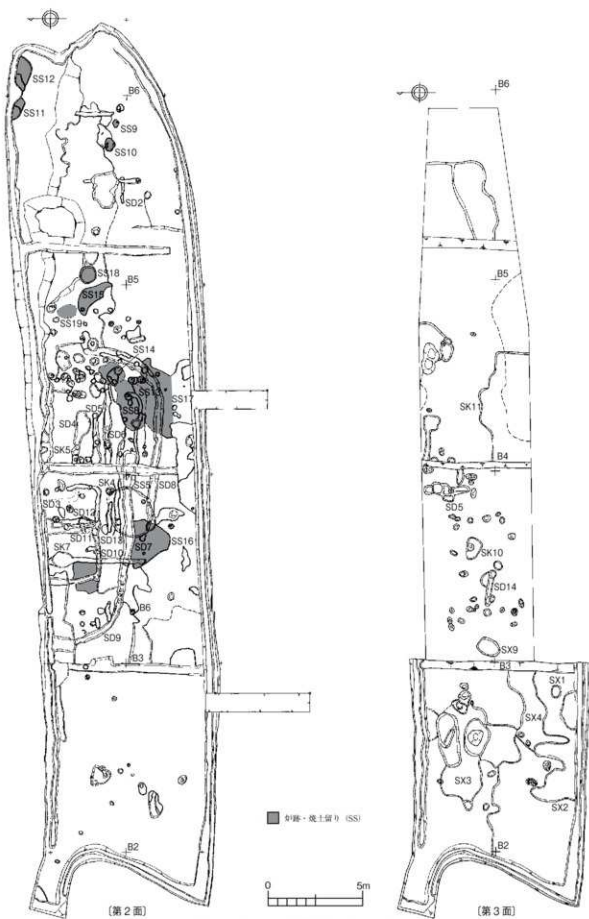
B2区に位置する。第3面検出遺構。検出面は標高5.3mを測る。P32は東西0.7m、南北0.62m、深さ0.22mを測り、平面形は西部がやや膨らむ略円形である。埋土は2層に分けられ、上層が黒灰褐色砂質土、下層が暗灰色砂質土であり、上層から土器が多量に出土する。P33はP32の西部に位置し、P32に切られる。埋土は黒灰褐色砂質土であり、上面から多量に礫が入る。底面中央部は一段掘り込まれており、その内部から1個体の土器が出土している。遺物は倒壺型を主体とする製塩土器や土師器が少量出土しており、倒壺型は特にP32から多く出土している。P32出土の第24図98・99、P33出土の第24図100・101を図化した。

22. SD15 (第18図)

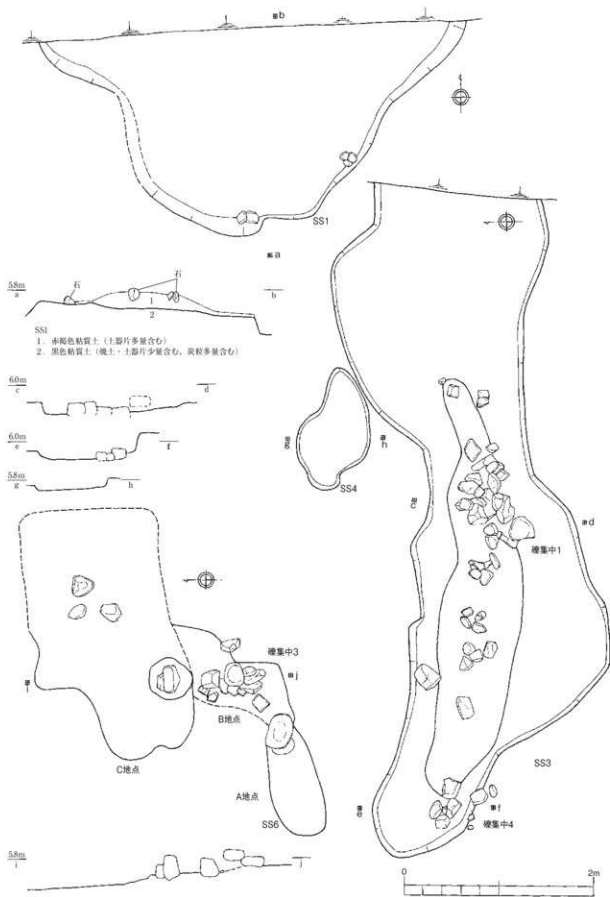
B3区に位置する。第3面検出遺構。検出面は標高5.2mを測る。東西0.34～0.64m、南北1.96m、深さ0.16～0.21mを測り、南北方向に延びる溝である。中央部には焼土溜りが認められる。遺物は棒状脚尖底を主体とする製塩土器が少量出土しており、そのうち第24図89～93を図化した。



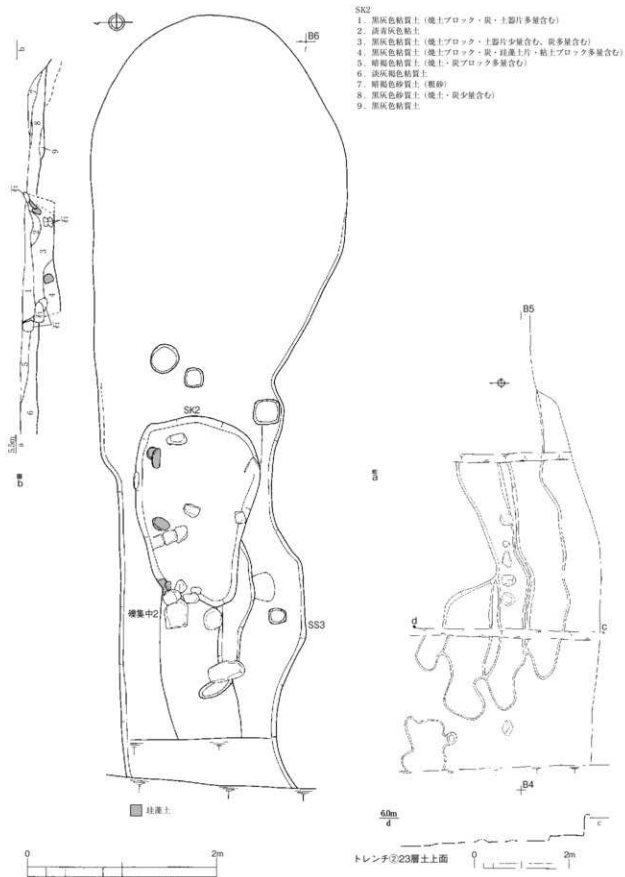
第8図 第1面遺構全体図 (S=1/200)



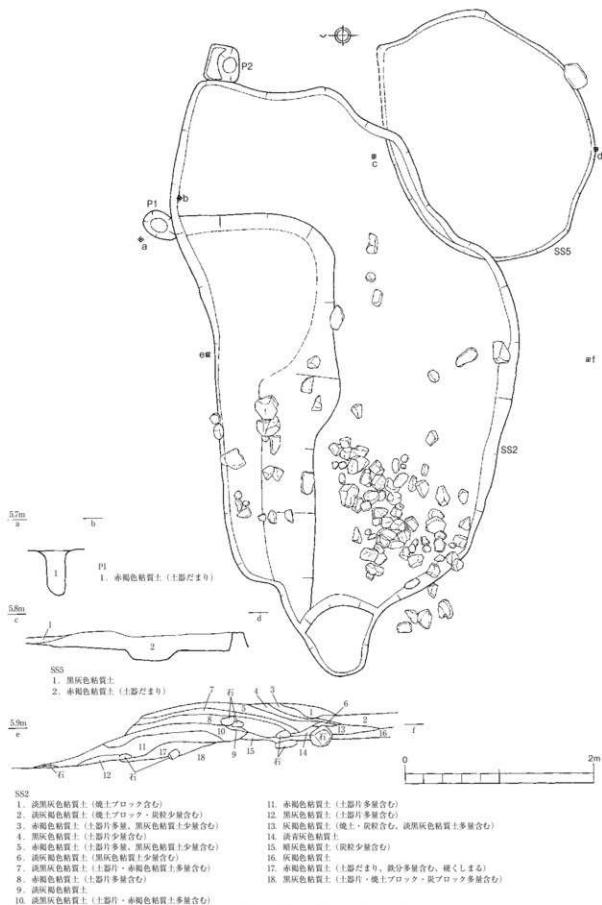
第9図 第2・3面遺構全体図 (S=1/200)



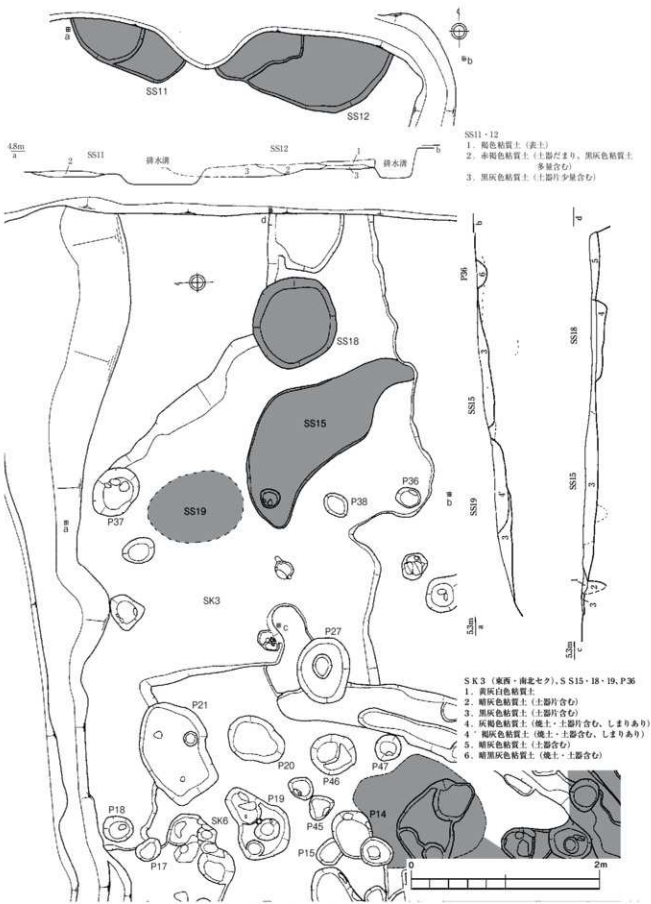
第10図 第1面遺構図・断面図1 (S=1/40)



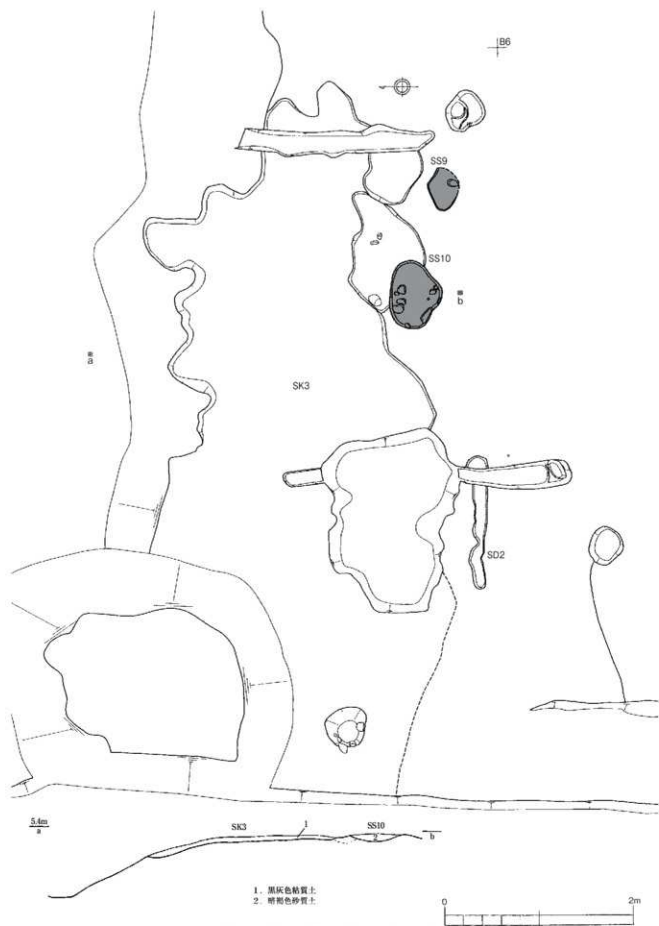
第11図 第1面遺構図・断面図2 (S=1/80・40)



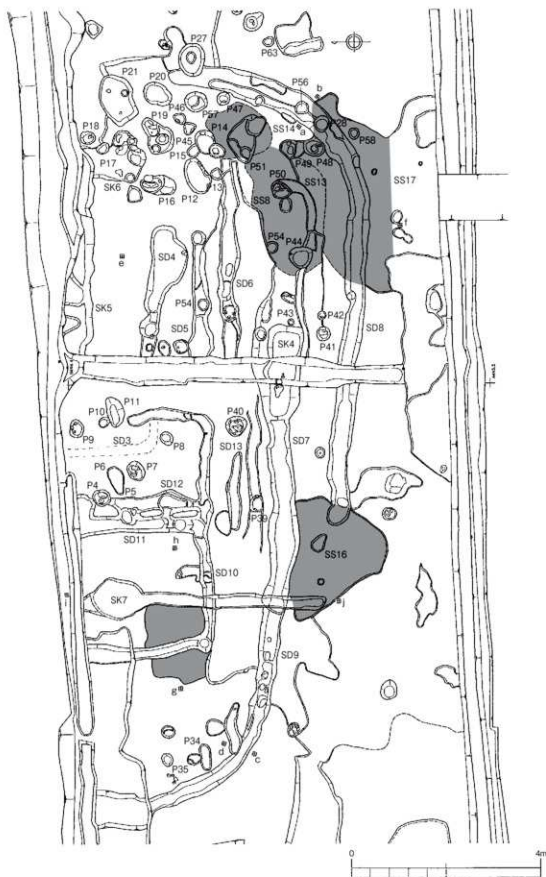
第12図 第1面遺構図・断面図3 (S=1/40)



第13図 第2面遺構図・断面図1 (S=1/40)



第14図 第2面遺構図・断面図2 (S=1/40)



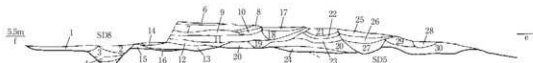
第15図 第2面遺構図3 (S=1/80)



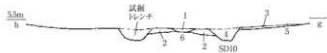
- SD8
1. 灰褐色砂粘質土(礎土・土膠含む)
 2. 灰褐色砂粘質土(暗灰色粘質土含む)
 3. 暗灰色粘質土(炭粒含む)
 4. 灰褐色粘質土(暗灰色粘質土含む)
 5. 黄褐色粘質土(堆山)
 6. 灰褐色粘質土(堆山)



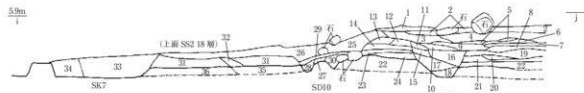
- SD9 (西側)
1. 黒灰色粘質土(礎土片・炭粒多量含む)
 2. 黒灰色砂粘質土



- SS8・13・17, SD6・6・8
1. 暗赤褐色粘質土(礎土・土膠含む)
 2. 暗赤褐色粘質土(礎土・土膠片含む)
 3. 暗赤褐色粘質土(炭粒含む)
 4. 暗黄灰色粘質土(暗灰色粘質土・炭粒・土膠含む、しまりなし)
 5. 赤褐色粘質土(礎土・土膠少量含む)
 6. 暗赤褐色粘質土
 7. 黄褐色粘質土
 8. 暗赤褐色粘質土(6層土より深い)
 9. 暗灰色粘質土(炭粒・礎土含む)
 10. 暗灰色粘質土(9層土より深い)
 11. 黒灰色粘質土(炭粒多量含む)
 12. 暗灰褐色土(礎土片・土膠片多量含む、しまりあり)
 13. 暗赤褐色粘質土(礎土・土膠片含む)
 14. 暗灰色砂粘質土
 15. 暗灰色粘質土(炭粒含む)
 16. 暗灰色粘質土
 17. 黒灰色粘質土
 18. 黄褐色粘質土(黒灰色粘質土含む)
 19. 暗赤褐色粘質土(礎土・土膠含む、しまりあり)
 20. 暗灰色粘質土(砂粒・炭粒含む)
 21. 赤褐色粘質土(礎土・土膠含む)
 22. 黒灰色粘質土(炭粒含む)
 23. 赤褐色粘質土(礎土・炭粒含む)
 24. 暗灰色砂粘質土(暗黄灰色粘質土含む)
 25. 暗赤褐色粘質土(土膠含む)
 26. 暗赤褐色粘質土
 27. 黒灰色粘質土(土膠含む)
 28. 黄灰白色粘質土
 29. 暗赤褐色粘質土
 30. 黒灰色粘質土(土膠含む)
 31. 黄褐色粘質土(堆山)
 32. 暗灰色砂粘質土(堆山)



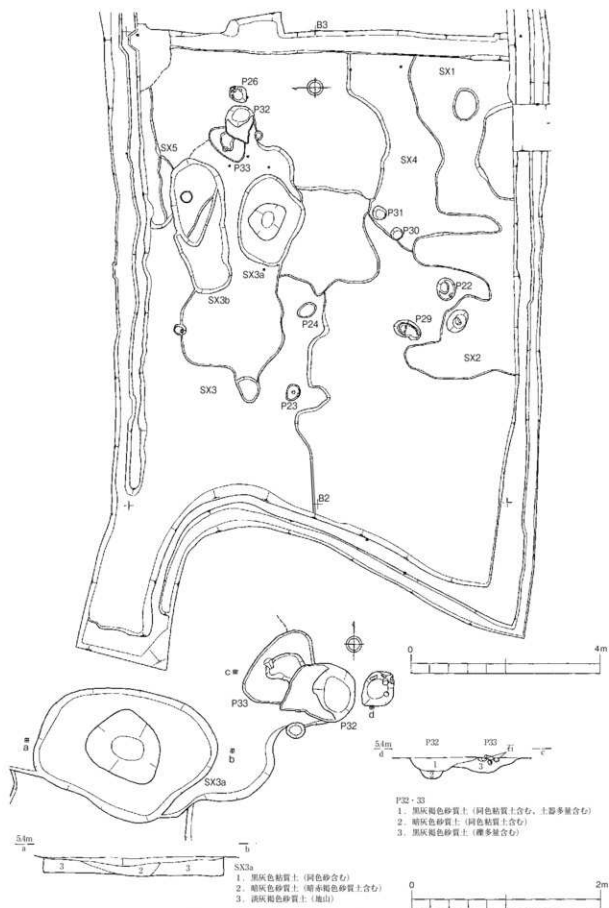
- 試掘
14-シテ
- 縦断面
1. 赤褐色粘質土(礎土)
 2. 暗赤褐色粘質土(礎土)
 3. 暗赤褐色粘質土(礎土)
 4. 暗灰色粘質土(炭多量含む)
 5. 灰褐色粘質土(堆山)
 6. 暗赤褐色砂粘質土(堆山)



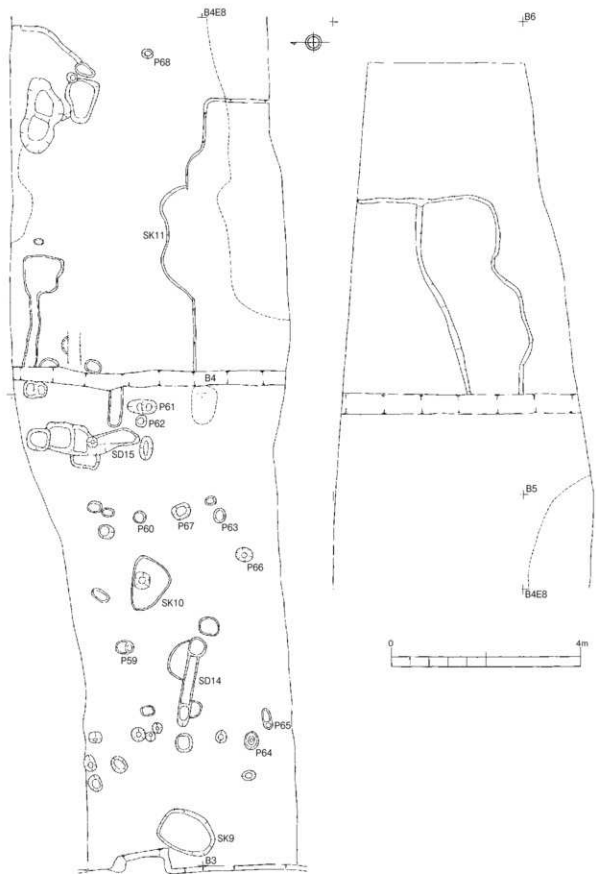
- SS16, SD7・10, SK7
1. 黒灰色粘質土(土膠含む)
 2. 淡灰褐色粘質土(礎土ブロック・炭粒少量含む)
 3. 黒灰色粘質土
 4. 黒灰色粘質土(礎土ブロック・土膠片多量含む)
 5. 暗褐色粘質土(炭ブロック多量含む)
 6. 暗褐色粘質土(炭ブロック少量含む)
 7. 暗灰色粘質土
 8. 暗褐色粘質土(礎土ブロック・炭ブロック多量含む)
 9. 暗褐色粘質土(礎土・炭ブロック少量含む)
 10. 暗褐色粘質土(礎土・炭ブロック多量、淡灰褐色粘質土含む)
 11. 赤褐色粘質土(土膠だまり)
 12. 暗灰色粘質土
 13. 赤褐色粘質土
 14. 暗褐色粘質土(淡灰褐色粘質土含む)
 15. 暗灰色粘質土(炭ブロック多量含む)
 16. 黒灰色粘質土(土膠片・礎土ブロック多量含む)
 17. 暗灰色粘質土(炭ブロック多量含む)
 18. 白灰色粘質土(黒灰色粘質土多量含む)
 19. 暗灰色粘質土
 20. 赤褐色粘質土(土膠だまり)
 21. 淡灰色粘質土
 22. 淡青灰色粘質土
 23. 黒灰色粘質土
 24. 暗灰色粘質土(暗灰褐色砂粘質土含む)
 25. 暗灰色粘質土(土膠片・礎土ブロック・炭ブロック多量含む)
 26. 暗灰色粘質土(礎土ブロック少量含む)
 27. 暗灰色粘質土(淡灰色粘質土ブロック含む)
 28. 暗灰色粘質土
 29. 暗灰色粘質土(炭化物多量)
 30. 暗灰色粘質土(黒灰色砂粘質土含む)
 31. 暗褐色粘質土
 32. 淡灰色粘質土
 33. 黒灰色粘質土
 34. 暗赤褐色砂粘質土
 35. 淡灰色粘質土
 36. 淡灰色砂粘質土



第16図 第2断面図3 (S=1/40)



第17図 第3面遺構図・断面図1 (S=1/80・40)



第18圖 第3面遺構圖2 (S=1/80)

第4節 遺物

1. 概要

古墳時代中期から平安時代にかけての須恵器、土師器、製塩土器が出土しており、数量としては圧倒的に製塩土器が多い。製塩土器は倒壺型脚台、棒状脚尖底、平底、支脚が認められ、出土数は個体数を把握しやすい倒壺型・平底は底部、棒状脚は脚部を数えると、倒壺型が約620点、棒状脚が約1660点、平底は2点程度となる。また、個体数を把握しづらい口縁部及び体部片も含めた総重量は約490kgにのぼる。

2. 製塩土器（第20～30図）

1～4はS S 1出土。1は棒状脚尖底の口縁部。外面はナデ調整、内面はハケ調整が残る。口縁上端部はやや内屈する。2は棒状脚尖底の脚部であり、指頭によるナデ・オサエ調整が施され、内底面にしほり目を残す。3は平底の底部であろうか。内外面ともにナデ調整が施される。4は倒壺型脚台。脚台内外面及び内底面はともに指頭によるナデ調整が施される。脚部は内底の厚さが約1cmと厚く、やや丸みを帯び、平坦面を有する端部に至る。

5～28はS S 2出土の棒状脚尖底。5～12は口縁部であり、内外面は指頭によるナデ・オサエ調整で、5・7・9～12は内面にハケ調整が残る。上端部はやや内湾・内屈するものが多く、5は端部に面取りを施す。13～18は頸部。内外面ともにハケ調整が施されているものが多い。斜め上方に大きく開く口縁部をもつ形態と考えられる。19は胴下半部であり、脚部が欠損する。内外面は指頭によるナデ・オサエ調整が施され、外面にはハケ調整が残る。20～28は脚部。端部が先細りする20を除いて、面を有するものが多く、27は特に幅広い。また、脚端部から内底面までは約4～5cmを測る20・21・23・25と約2.5～3cmを測る22・24・26～28に分かれる。全体的に脚部内外面と内底面は指頭によるナデ・オサエ調整が施されており、内底面にはしほり目が認められる。

33はS S 3出土の棒状脚尖底の口縁部であり、上端部はわずかに内湾する。内外面ともに指頭によるオサエ調整が施される。

34・35はS S 4出土の棒状脚尖底。34は口縁部であろうか。内外面ともに磨耗のため調整は不明である。35は頸部。外面には、ハケ調整が施される。

36～44はS S 5出土の棒状脚尖底。36～38は口縁部であり、上端部でやや内湾・内屈する。外面は指頭によるナデ・オサエ調整が施され、36の内面にはハケ調整が認められる。39～41は頸部であり、10cm前後を測る。全体的に工具によると思われるナデ調整が認められる。42～44は脚部。全体的にナデ・オサエ調整が施されており、43の体部内面にケズリと思われる痕跡が残る。

46～48はS S 6出土の棒状脚尖底。46・47は頸部。内外面ともにナデ調整が施される。48は口縁部であろうか。内面にはハケ調整が残る。

50はS S 7出土。棒状脚尖底の頸部であり、外面にはナデ、ハケ調整が施される。

51～53はS S 13出土の棒状脚尖底。51は口縁部であり、内外面に指頭によるナデ・オサエ調整が施される。全体的に内外面はナデ・オサエ調整を施し、ハケ調整も認められる。52は脚部であり、内底部は厚く、幅約3cmの面を持つ。内底面から脚端部まで6cmを測る。53は胴下半部で脚部が欠損する。内外面に指頭によるナデ・オサエ調整が施され、ハケ調整も残る。

54・55はS S 16出土。54は棒状脚尖底の頸部から胴部。外面は不明瞭であるがハケ調整が認められ、内面はハケ・ナデ調整が施されるも、粘土粗輪積み痕が明瞭に残る。55は支脚であろうか。内外

面は調整不明。

57はS S 17出土。棒状脚尖底の口縁部から頸部。口縁上端部はやや内湾し、51と類似する。指頭によるナデ・オサエ調整が施され、頸部にはハケ調整も認められる。

58・59はS K 2出土の棒状脚尖底。58は口縁部。上端部が内屈し、内面はハケ、外面は指頭によるオサエ調整が施される。59は頸部。内外面はハケ調整が施され、外面はナデ消される。

60はS K 4出土。棒状脚尖底の口縁部。頸部から斜め上方に開き、端部は先細りする。外面はナデ調整が施され、ハケ調整がわずかに残る。

61はS K 5出土。棒状脚尖底の頸部。内面はナデ調整が施されるが、粘土紐輪積み痕が残る。外面はケズリの後ナデ調整が施される。

62～68はS K 3出土の棒状脚尖底。62・63は口縁部であり、上端部がやや内湾するが、前者は端部が先細りするに対し、後者は面を持つ。外面は指頭によるオサエ、内面はハケ調整が施される。64・65は頸部。64の外面はハケ調整が施され、頸部より上部は工具によるナデ調整。内面は粘土紐輪積み痕が、明瞭に残る。頸部より上部は剥離する。65は頸部から胴部で内面は頸部辺りに、外面は頸部から胴部にかけてハケ調整を施す。66は胴下半部。内外面は指頭による調整が施され、脚部は欠損する。67・68は脚部。脚端部が先細りし、内底面からは5.5cm前後を測る。

72・73はS K 9出土の倒壺型脚台。脚部内外面は指頭によるナデ調整が施される。共に脚端部に面を持ち、72は内底部が非常に厚い。

76はS X 1出土の倒壺型脚台。脚部内外面、内底部は指頭によるナデ調整が施される。脚端部に面を持つ。内底部は72と同様に厚く、約1.3cmを測る。

77はS X 2出土の倒壺型脚台。内底面は指頭によるナデ調整が施される。脚端部に面を持つ。

82はS X 3出土の倒壺型脚台。脚部内外面、内底部は指頭によるナデ調整が施される。脚端部にやや広めの面を持ち、内底部は非常に薄い。

83～87はS D 8出土。83～86は棒状脚尖底。83は胴部。脚部は欠損する。内面はハケ、外面はケズリ、ナデ調整が施される。84～86は口縁部であり、上端部で内湾・内屈する。内外面はナデ・オサエ調整が施され、86の外面にはハケ調整が残る。87は支脚。内面は指頭によるナデ・オサエ、外面はオサエ調整が施される。

89～93はS D 15出土の棒状脚尖底。89は口縁部であり、上端部は内湾・内屈する。内外面は指頭によるナデ調整が施される。90は頸部。内面はわずかにハケ調整が認められ、内面はケズリ、ナデ調整が施される。頸部より下部は剥離する。91～93は脚部。内底面から脚端部までが5cmを測り、端部が面を持つ92・93と6cmを測り、端部が先細りする91がある。内外面は指頭によるナデ調整が施されており、内底面にはしほり目が認められる。

94はP 14出土。棒状脚尖底の頸部。内面はハケ、外面は口縁部が指頭によるナデ・オサエ、胴部がハケ、ナデ調整が施される。

95はP 26出土の倒壺型脚台。脚部内面には指頭によるナデ調整、内底面はハケ調整が施される。脚端部に面を持ち、内底部は厚い。

97・98はP 32出土の倒壺型脚台。脚部内面と内底面には指頭によるオサエ調整が施される。共に脚端部に面を持ち、内底部は厚い。

99はP 33出土の倒壺型脚台。脚部内外面は指頭によるオサエ調整、内底面にはハケ調整が施される。脚端部はあまり明確でないが面を持ち、内底部は厚い。

102はP 39出土。棒状脚尖底の脚部。脚端部がやや先細りし、内底面と脚部内外面は指頭によるナ

デ・オサエ調整が施される。

103はP54出土。棒状脚尖底の口縁部。上端部は内湾・内屈する。内面はケズリ・ナデ、外面はナデ・オサエ調整が施される。

104はP59出土の倒盃型脚台。脚部内外面は指頭によるナデ調整が施され、脚部外面端部は指頭によるオサエ調整が認められる。脚端部はやや先細りし、明確な面を持たない。内底部は厚い。

105はP60出土。棒状脚尖底の脚部。内底面から脚端部が4.7cmを測り、端部が先細りする。内底面も含め、指頭によるナデ調整が施される。

106はP64出土の倒盃型脚台。脚部内外面は指頭によるナデ調整が施される。脚部外面端部は指頭によるオサエ調整が認められる。脚端部は面を持ち、内底部は厚い。

107はP68出土。棒状脚尖底の口縁部。内湾ぎみに立ち上がり、端部はやや丸く収まる。内外面は指頭によるオサエ調整が施される。

108～204は遺構外出土。108・116～118は第1面対応層出土。108は棒状脚尖底の口縁部。上端部はナデ調整により軽く面を持つ。116は4区西部で確認した第1面の黄灰色砂質土出土。棒状脚尖底の胴部。内外面は指頭によるナデ・オサエ調整が施される。117・118は棒状脚尖底の頸部。内外面はハケ調整後、ナデ調整が施される。

109～114・119は第1面検出面から第2面対応層出土。109～114は棒状脚尖底の口縁部。上端部が内湾・内屈する110～113、やや内湾するが先細りする109に分けられ、前者は端部に面をもつ。114は内湾せずに頸部からの立ち上がりそのまま直線的に開く。外面は指頭によるナデ・オサエ調整が施され、内面にはハケ調整が残る。119は棒状脚尖底の頸部。内面はナデ調整が施されるが、粘土紐輪積み痕が明瞭に残る。

115・120～125はトレンチ②23層上面出土。第1面下層から第2面検出面对応。すべて棒状脚尖底である。115は口縁部。上端部が内屈する。120～123は頸部。内外面の調整は120～122が指頭によるナデ調整、123がハケ調整である。124・125は脚部。端部が先細りし、内底面から端部は3～3.6cmを測る。外面は指頭によるナデ・オサエ調整が施され、内底面にははしほり目が残る。125の胴部外面に煤が付着する。113・114・117～122は頸部から胴部。全体的に指頭による調整が施されるが、114・118・119はハケ調整が残る。

126～188はトレンチ①6層、トレンチ②32層等、第2面検出面及び上層より出土。188の平底の可能性のある底部を除いて、すべて棒状脚尖底である。126～150は口縁部。全体の傾向として上端部が内湾・内屈するものが多いが、144～147は上端部が先細りし、148～150はあまり内湾せずに頸部からの立ち上がりそのまま上方へ開く。全体的に指頭によるナデ・オサエ調整が施されており、内面は横・斜位、外面は縦位のハケ調整が認められる。また、145の内面にはへら書きの「×」がみられる。151～169が頸部から胴部。170～173が胴部下層部。全体的に指頭によるナデ・オサエ、ハケ調整が施されるものが多い。174～187が脚部。脚端部は先細りする174・175の他は面を持つもので占められる。188は円盤状底部から直立気味に立ち上がる深鉢形態を呈するもので、底径9.4cmを測る。内外面はナデ調整が施され、底部外面に板目状の圧痕を残す。製塩関連の土器の可能性があり、その場合平底タイプとみられる。

189～200は遺構外出土。層位関係から第3面検出面及び第2面黒灰色粘質土層下層出土。倒盃型脚台は底径7～9cm、脚高（内底面から脚端部）1.4～2.6cm、内底の厚さ0.4～1.2を測る。脚端部に平坦面をもつもの（191～197・199・200）と平坦面をもち、先細りするもの（189・190）がある。脚部内外面と内底面は指頭によるナデ・オサエ調整が施されており、192の脚部外面、196の内底面、198の脚

部外面と内底面にハケ調整が残る。

201～204は調査区排水溝掘削時に確認できたものであり、面対応が不明確なものである。いずれも倒壺型脚台タイプであり、201は内底部・脚裾部は薄く、脚端部にかけて先細りするが、面を持つ。脚部外面が指頭によるナデ調整、脚部内面と内底面は工具による調整が施される。203・204は脚台部から体部まで復元できたものである。体部内外面は指頭によるナデ調整が施される。脚端部はやや先細りし、弱い面を持つ。

3. 須恵器 (第21・23・30・31図)

29～31はS S 2出土の無台坏。内外面はロクロナデが施され、30・31の外底面はヘラ切りとなる。31の内底面に墨痕が認められる。49はS S 6出土の横瓶胴部。外面は平行タタキ後ロクロナデ、内面は同心円状当て具痕が認められる。出土地点と層位関係から205・209と同一個体の可能性がある。205・209はトレンチ③2層出土。69・70はS K 3出土の甕胴部。外面はタタキ、内面は同心円状当て具痕が認められ、出土地点と層位関係から208・210と同一個体の可能性がある。206は遺構外出土の坏蓋。層位関係は第2面に対応する。内外面はロクロナデ、外面にはロクロケズリも認められる。207は遺構外出土。層位関係はトレンチ②24・26層に対応。壺口縁部で、内外面はロクロナデ、内面には降灰が顕著に認められる。同一個体の可能性がある破片がS D 3から出土している。212は遺構外出土の有台坏。層位関係は第2面に対応する。内外面はロクロナデで、内面は降灰、重ね焼痕が認められる。

4. 土師器 (第21～24・31・32図)

32はS S 3出土。内外面は磨耗のため調整が不明瞭であるが、内面はわずかにナデ調整が認められ、埴などの底部と思われる。

45はS S 5出土の壺口縁部。磨耗が顕著であり、調整は不明瞭であるが、内面はわずかにハケ調整が認められる。

56はS S 16出土。口縁部と底部の接点はないが、出土地点や胎土等から同一の可能性がある。口縁部は大きく「く」の字に外反し、復元口径は約32cmを測る。外面は指頭によるオサエ、内面はナデ調整が施され、頸部にハケ調整が残る。胴部から底部にかけては外面がハケ、内面はナデ調整が施される。

71・74はS K 9出土。71は甕の口縁部であり、内外面はナデ調整が施され、内面にハケ調整が残る。74は甕の口縁部から胴部。「く」の字に外反する口縁部から大きく張る胴部につながる。頸部より下部は内外面にハケ調整が施されている。口縁部内面の上部から胴部外面にかけて、煤などの黒色物が付着する。

75はS K 11出土。甕口縁部。内外面はナデ調整が施され、部分的にハケ調整が残る。

78はS X 2出土。甕口縁部。内外面はナデ調整が施される。

79・80・81はS X 3出土。79は壺。口縁部と底部の接点はないが、出土地点や胎土等から同一の可能性がある。80は鉢。内面はミガキ、外面はナデ調整が施される。外面に黒斑が認められる。81は甕の胴部から底部。内面はハケ調整後ナデ、ケズリ（一部）、外面はハケ調整が施される。外面には煤が付着する。

88はS D 9出土。甕底部。内面は指頭による調整、内底面はハケ調整が残る。

96はP 31出土。高坏坏部。内外面ともに、磨耗が激しい。

100はP 33出土。甕の頸部から底部。内外面ともにハケ調整が施され、外面には黒斑が認められる。

101はP 39出土。壺口縁部。

213～248は遺構外出土。213～216は層位関係から第2面に対応する。213は甕口縁部。内外面はナデ調整が施され、煤が付着する。214は内黒土師器塊。外面はナデ、ケズリ調整が施され、部分的に黒色化する。216は塊の底部。調整は不明瞭であるが、内面に指頭圧痕が認められる。215は甕底部で内外面が赤褐色を呈す。

217～222は層位関係から第2～3面に対応する。217～219は甕口縁部。218は立ち上がりが緩く、端部が先細りする。内外面はハケ調整が施され、口縁部内面に黒斑が認められる。220・221は塊。220は内外面がナデ、221はミガキ調整が施される。222は高坏脚部。脚部外面はミガキ調整が施され、内面は粘土紐輪積み痕が明瞭に残る。

223～242は層位関係から第3面に対応する。223～227は甕。口縁部が「く」の字に大きく外反するものが多い。総体的に口縁部内外面はナデ調整が施されるが、223・225ではハケ調整が一部残る。223～225は口縁部外面に煤が付着する。227は甕口縁部から胴部。口縁部は胴部から緩やかに上方に向き、端部はやや丸く収まる。内外面は指頭によるナデ調整が施される。粘土紐輪積み痕が明瞭に認められる。胴部外面に煤が付着する。

228は壺口縁部。内外面はナデ調整が施される。229は壺口縁部。内外面はミガキ調整が施される。230は壺。口縁部から胴部上半と底部の接点は無いが復元器高約13cmを測る。口縁部の内外面はナデ調整、胴部の内面はハケ、外面はナデ、底部は内面がハケ・ナデ、外面がミガキの調整が施される。231は塊。内面はナデ、外面はナデ・ケズリ調整が施される。232は塊。内面はハケ後ミガキ、外面はミガキ調整を施す。内面には黒斑が認められる。233は内黒土師器塊。内外面はミガキ調整が施され、外面の一部に黒色化が認められる。

234～237は高坏坏部。237以外は外面にミガキ調整が認められる。238は高坏脚部。脚部内面にしほり目が認められる。外面はミガキ調整が施され、黒斑が認められる。239～241は高坏坏部から脚部。239の坏部内外面はミガキ調整が施される。脚部は外面がミガキ、内面はハケ・ナデ・ケズリ調整が施される。240は坏部・脚部内外面はミガキ、脚部内面は指頭による調整が施される。241は坏部内外面、脚部外面はミガキ、脚部内面はケズリ、ナデ調整が施される。

242～247は表土除去や調査区排水溝掘削時に確認できたものであり、面対応が不明確なものである。242・243は甕口縁部。共に磨耗のため調整は不明瞭である。244～246は高坏坏部。内外面はナデ調整が施され、245の坏内底面、246の外面に黒斑が認められる。247は高坏脚部。外面はミガキ、内面はケズリ調整が施される。

5. 出土製塩土器の特徴等について（第20～32図）

今回確認された製塩土器は、倒壺型脚台タイプ、棒状脚尖底タイプ、平底タイプ、及び支脚があり、各々ある程度まとまりが各面においても認められることから、タイプ別に一括して特徴等について述べる。

倒壺型脚台タイプは、203・204にみられるように倒壺形脚台部より上部に向けて直線的に広がる円筒形状を呈するものである。204は口縁端部は欠くもののほぼ完形に近く推定復元されるもので、全体の復元器高は24.4cm、その内の脚台高（内底から脚端部の高さ）は2.3cm、口径は10cm程度で、容量は約0.7ℓを測る。図化資料における脚台部では（第19図参照）底径7～8.9cm、脚台高1.3～3.6cmを確認しているが、脚台高は1.4～2.7cmを中心をおくもので201のように3.6cmを測る脚台高の高いタイプもみられる。また脚台端部の底面は乾燥等の際、板状のものに置いた時に粘土が内側に折り曲がってできる平坦面をもつもので、脚内面は端部から真中に向かってナデ上げ指頭痕を残すものが主体的であるが、82のように比較的器壁も薄く丁寧にナデ調整しているものも確認されている。胎土では、砂粒

に海面骨針を含むものが多くみられた他、98・191・202～204等の混和材をあまり含まず比較的緻密なものもみられた。これらの資料は第3面の遺構及び包含層等から主体的に出土するもので、時期的にはP33の99の脚部と共伴出土した100の土師器甕が5世紀後半と思われる他、SX3出土の82が80の土師器鉢と共伴することから6世紀後半～7世紀代とみられ、第3面相当層出土の223～241の土師器についてみた場合、概ね5世紀後半から6世紀後半～7世紀代と考えられる。戸調幹夫氏の分類¹⁾によれば、「脚台底径6～7cmを中心とするが9cm前後のものもみられるもので、脚台高は2.5から3cm前後に分布する」とする第II型式に近い様相をていしているものと思われ、時期については七尾市国分高井遺跡出土品等を標式として5世紀中頃から同後半を想定されている。また、七尾市小島西遺跡では5世紀後半の同タイプものが出土しており、脚台高は1～2cm辺りに集中がみられ本遺跡と近似する。本遺跡の場合下限に幅をもつものの上限については、土器内底面が低く下がる様相を認めることから戸調第II型式のなかでも後出の傾向と捉え5世紀後半でも新しい時期に中心をおくものと考え²⁾。

棒状脚突底タイプでは、まず①ほぼ完形で全形が窺える資料として134の1点が認められる。突底の下部は欠損するものの口縁部が内湾気味に立ち上がり口縁端部が内側に屈曲し、頸部の屈曲から胴部にかけてあまり膨らまずに伸びて底部へと窄まってくる形状を呈する。器体の調整は口縁部から底部にかけて内外面ナデや指オサエによるもので、残存器高32.7cm、口径19.1cmで、容量は約2.5ℓを測る。次に②器高に占める口縁部の高さの割合をみた場合、①タイプに比べ低い割合を呈し、若干胴部径が小さいもの(S S 13=51～53、S S 17=57、S D 8=83～86)、③器高に占める口縁部の高さの割合をみた場合、口径が広がりを見せる中で①タイプに比べ高い割合を呈し、胴部径が大きいもの(S S 2=9～12、131・132・133・135・148等)が認められる。また、④全形は窺い知れないが頸部がくの字状に窄まるもので器壁が比較的厚いもの(64)が特徴的である。

器体の調整において外面の口縁部がナデや指オサエによることは全体的に共通するものの内面の口縁部から頸部ないし胴部にかけてと外面の頸部から胴部にかけてハケ調整を残すもの(口縁部:9～12等、口縁～頸部131・132等、胴部53・83・94等)が認められる。

底部の内底面の調整では、A. しほり目がみられ指オサエ程度で真中辺りに少し凹み(孔)をもつもの(20・174・177・178・181)、B. しほり目がみられ真中が少し凹み(孔)ナデ調整を施すもの(2・21・22～26・28・85・91・93・124・125・172・178・180～182・184・185・187)、C. しほり目がみられ真中が少し盛り上がるものでナデ調整を施すもの(105)、D. ナデ調整により内底面が平らであるもの(42～44・52・67・68・179・183)、E. 内底周囲を強くナデ、真中辺りが盛り上がるもの(27)、F. 内底周囲の絞りの合わせ目の粘土が盛り上がるもの(92)、G. ハケ(板)状工具で底から上部へ向かって調整するもので真中辺りに孔があるもの(175)、H. ハケ(板)状工具で底から上部へ向かって調整するもので真中辺りが盛り上がるもの(186)の各種が認められ、B類が多くみられるようである。また、脚部の形状では、a. 脚部が比較的太く端部に面をもつものが主体的様相を呈しており、それ以外では、b. 脚部が比較的長く細く端部がやや尖り気味に収められているもの(67・68・91～93・105)、c. 脚部がaよりさらに太く端部が短く面をもち、内底面が比較的広くみられるもの(27)が顕著である。脚bタイプは第3面のS D 15・P 60より出土(91～93・105)していることからこれをやや古相とみて、次に第2面で主体的にみられる指頭等による調整で凹凸も残る端部に面をもつもの(脚a)から第1面のさらに太く端部が短いもの(脚c)を新相と捉えることができる。

口径(復元推定含む)は16～39.4cmを確認しており、概ね21～25cm辺りに中心をおくが、大口徑の

ものは③タイプで占める。また胎土では砂粒の混入されたものが多くみられ、それに加え海面骨針を含むものも定量確認される他、少量ではあるが混和材をあまり含まないもの（②タイプ等）も認められる。

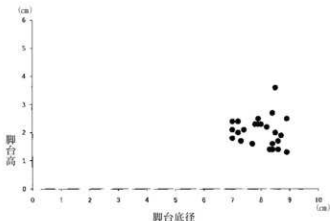
平底タイプは3とその可能性をもつ188の2点が確認されているのみで、また支脚も2点（55・87）と僅少なから確認されている。平底タイプの3は底径4.8cmを測る小型のもので、二次焼成の痕跡を認めるが、188は底径9.4cmを測る。支脚は断片のため確定は難しいが、円柱状の中空のものと思われ、上下端に凹みをもたせるため張り出させたものである。

棒状脚実底タイプ・平底タイプ・支脚の各資料は第2面以降第1面での遺構及びその包含層等から主体的に出土したものであり、共存遺物としては、第2面では包含層資料となるが、前段階と同時期遺物から206の須恵器杯蓋や212の須恵器有台坏等の9世紀前～中葉（田嶋編年V期）³⁾に相当するものを認めており後者に主体を置くものと思われる。第1面では、SS2において9世紀前～中葉の遺物を認める他、SS3出土の土器器塚皿類より11世紀後半～12世紀初頭の遺物を確認しているが、これについては廃棄層や土砂の移動等による再堆積に係る混入と理解される。能登における棒状脚実底タイプの動向を戸調分類²⁾を基にみても、6世紀後半からみられる倒盃型脚台タイプの様相を残す筒状の体部に直口口縁が付く小形実底形状を呈するもの（第I型式）から筒状の体部からやや外反気味に直口する口縁あるいは頸部から大きく外反する口縁を有するタイプ（第II型式）を経て、奈良・平安時代を盛期とする径の大きな体部に大きく外反する口縁を有するタイプ（第III型式）で脚部の尖化傾向を強めたもの（第III型式b類）から太く大形の尖底形状（第III型式a類）へと推移することがわかり、また、少なくとも能登町真脇遺跡にみられるように10世紀前半以降の平安時代まで存続していたことが知られている。本遺跡についてもこの動きの中で理解されると思われ、戸調分類⁴⁾の第III型式のものを主体的に認めており、胴部の細身から大型化する流れからすると、②タイプ→①タイプ→③タイプと捉えることができ、脚部の形状についてもbタイプからaさらにcタイプへの動きがみられる。①・③及び脚部a・cタイプさらに④タイプとした頸部がくの字状に窄まるタイプも含めて9世紀末葉から10世紀前葉を主体とする七尾市赤浦やまあと遺跡⁵⁾に類例を求められるほか、④タイプについては、能登町真脇製塩遺跡⁶⁾でも確認されており同タイプの使用期間を考えるうえで参考となる。

よって本遺跡では、棒状脚実底タイプ戸調分類の第I・II型式とされるものは確認されておらず、次の第III型式のものを認めるもので、脚bタイプについては、戸調第II型式が7世紀後半以降極端に減少すること、戸調第III型式b類の次のa類の標式である能登町新保C遺跡が7世紀後半～8世紀初頭に比定されていること等も勘案すると、本遺跡第3面の下限時期の6世紀後半～7世紀代以降に設定できると思われ、②タイプが後続すると考えられる⁷⁾。また、②タイプについては形状が筒状を呈するが、容量的には①タイプに近いことからその直前段階と押さえておきたい。①タイプ・脚aから③・④タイプ・脚cについては9世紀前～中葉を中心としているが、七尾市赤浦やまあと遺跡や能登町真脇製塩遺跡の例からすると③・④・脚cタイプは1段階新しくなる可能性が高いと思われ、本遺跡では10世紀代まで存続したと考える。

平底タイプについては、底径の小さいものは内浦町越坂D遺跡、七尾市大野木タキシロ遺跡、同市佐々波C遺跡、羽咋市滝・柴垣海岸A遺跡等で確認されており、本遺跡のように支脚を伴う事例が多いようである。戸調分類¹⁾では底径等を指標として3型式に分類しており、底径10cm前後を測る第II型式と底径5cm前後を測る第III型式のものが確認されている。時期的には第II型式を奈良時代末期から平安時代初期を上限とし10世紀後半を下限としており、第III型式については奈良時代末期から平

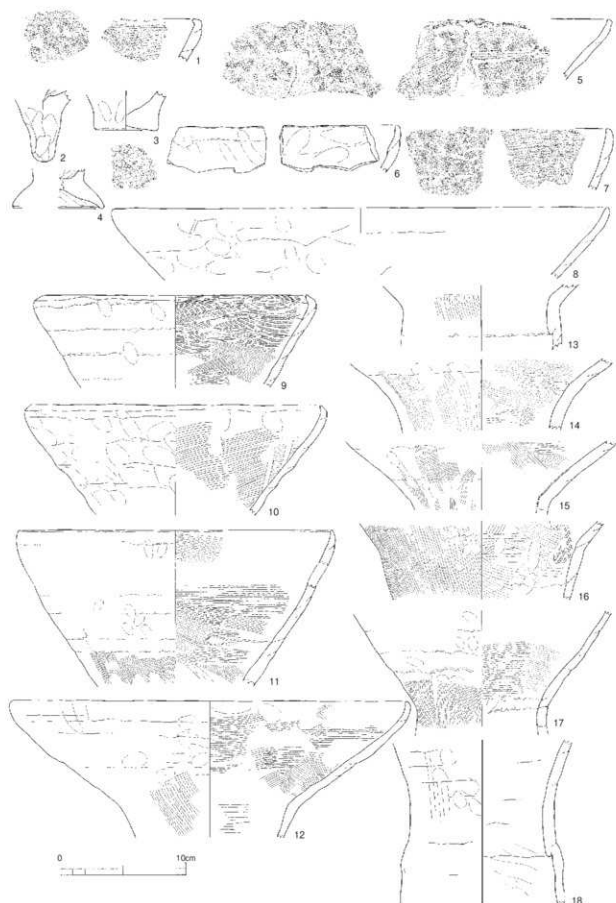
安時代初期以降のものとされている。支脚については戸調分類¹⁾「頭部・底部に張り出しをもち、脚部中央が貫孔されている円柱状支脚」のD類とみられる。橋本澄夫氏や戸調氏等⁸⁾によれば小型平底タイプと支脚の伴出事例の多さからそれらがセットをなす可能性が強いと思われること、小型平底タイプの容量が他の土器と比べ極端に縮小していることから焼塩用等として使用されたものと考えられると指摘されている。本遺跡では棒状脚尖底タイプが細身から大型化する9世紀前～中葉以降10世紀代において平底タイプ及び支脚を認めるものその出土量も僅少なことから棒状脚尖底タイプを主体とした土器製塩を行ったと推察される。



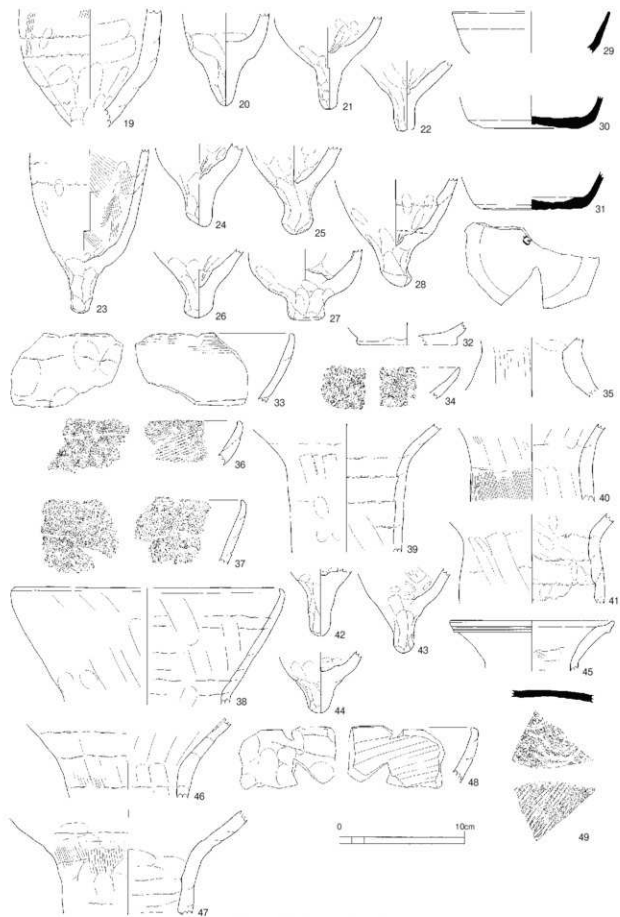
第19図 製塩土器例型型脚台タイプ脚台底部径指数

注

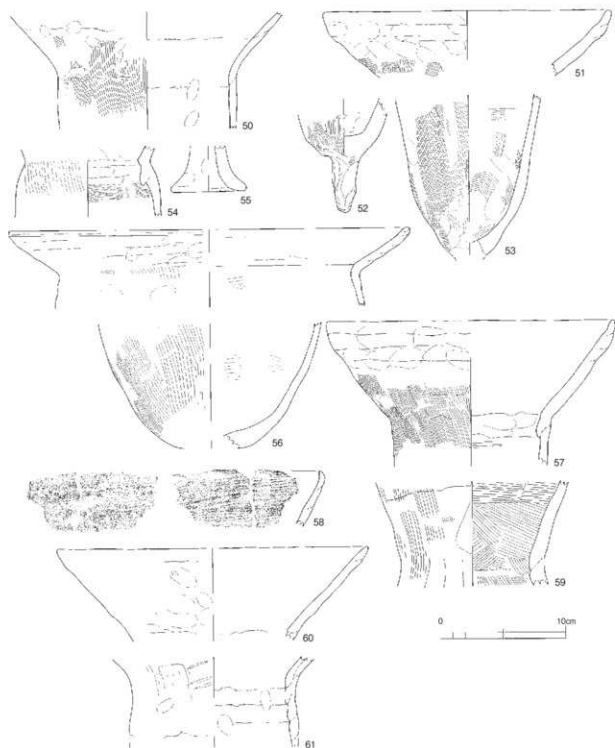
- 1) 戸調幹夫1983「能登式製塩土器—型式分類とその変遷」『北陸の考古学』石川考古学研究会々誌第26号 石川考古学研究会
- 2) 戸調氏は注1文献で第II型式の時期については、「因分高井遺跡の盛期にあたる宮地式期ないしその直前にあたる5世紀中頃から後半を想定」している。小島西遺跡(4層)出土品の時期については、漆野福年(田嶋明人1986「考察—漆野遺跡出土土器の編年的考察—『漆野遺跡1』石川県立歴史文化財センター」)の13群の可能性があり5世紀後半としている。ともに漆野福年13群を中心とするものだが、本遺跡では脚台高が低くなる傾向から小島西遺跡により近い様相を示すものと思われる。また本遺跡の伴出遺物の時期が同13群でも新相—14群ものを主に確認していることから、5世紀後半でも新しい時期と想定した。
- 3) 出土土器の時期については田嶋福年(田嶋明人1988「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編石川考古学研究会・北陸古代土器研究会)のV期に該当するものが中心と思われ、田嶋明人氏はV₁・V₂期を9世紀第2・3・4半期(松任市教育委員会1996「東大寺領横江庄遺跡II」)に、出越茂和氏は9世紀前～中頃に位置付けられている(出越茂和1997「北陸北西部における10・11世紀の土器様相」『シンポジウム北陸の10・11世紀代の土器様相』北陸古代土器研究会)。
- 4) 注1文献と戸調幹夫1988「棒状脚付深鉢形製塩土器の下限とその役割」『石川県立歴史博物館紀要1』石川県立歴史博物館
- 5) 七尾市赤浦やまあと遺跡は、9世紀前葉(注2:田嶋福年N₂新)からみられるが主体をなすのは、9世紀末～10世紀前葉(田嶋福年M₁期)である。
- 6) 能登町真脇製塩遺跡は9世紀第4四半期～10世紀中頃(注2:田嶋福年M₁～V₁)にかけて稼動していたものであるが、④タイプを出土した製塩炉03は田嶋福年V₁期(注2田嶋:9世紀第4四半期～10世紀初頭)に該当するものである。
- 7) 脚bタイプは戸調分類の第III型式b類に対応すると考えるが、戸調氏(注4文献)はその時期については、七尾市中島町外遺跡(橋本澄夫ほか1981「中島町小牧・外遺跡」中島町教育委員会)で、古墳時代後期から奈良時代初頭の包含層中より相当量のb類が出土するが帰属年代は限定できていないとしている。②タイプとは、細片のため確定はできないが、脚b67の体部への立ち上がり若干②タイプより細身と感じられることから脚bが古相と思われる。また、②タイプは比較的体部が膨らまない形状から体部径的には大きいもののどちらかといえば前型式の様相を残すものと思われる。
- 8) 橋本澄夫1976「内浦町の生産関係考古資料二題」『石川考古学研究会々誌』第19号 石川考古学研究会、橋本澄夫・戸調幹夫1994「6石川県」『日本土器製塩研究』青木書店、戸調注1・2文献。



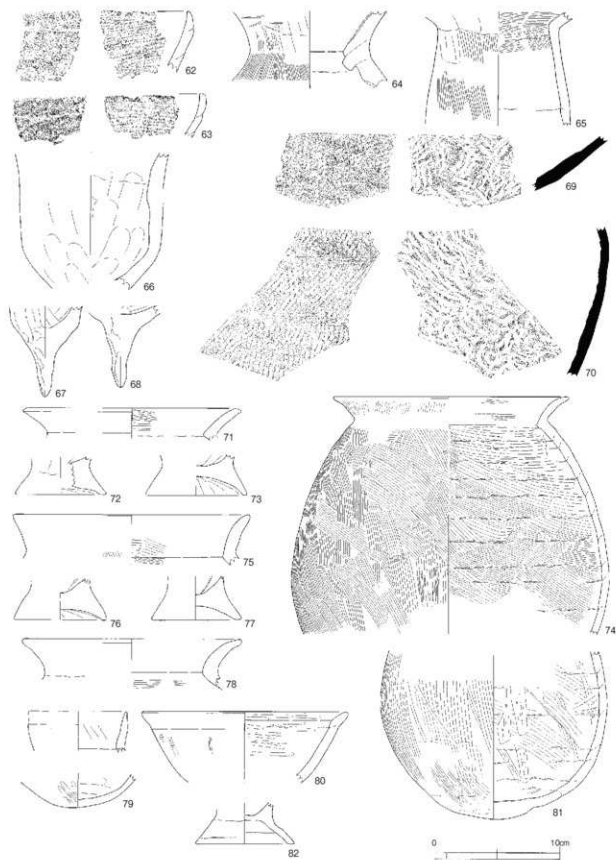
第20図 遺物実測図1 (S=1/3)



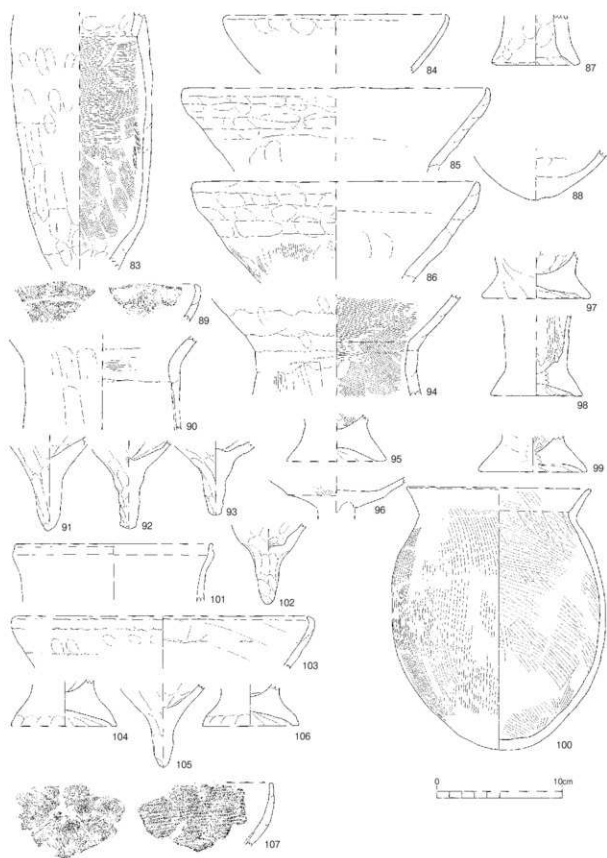
第21回 遺物実測図 2 (S=1/3)



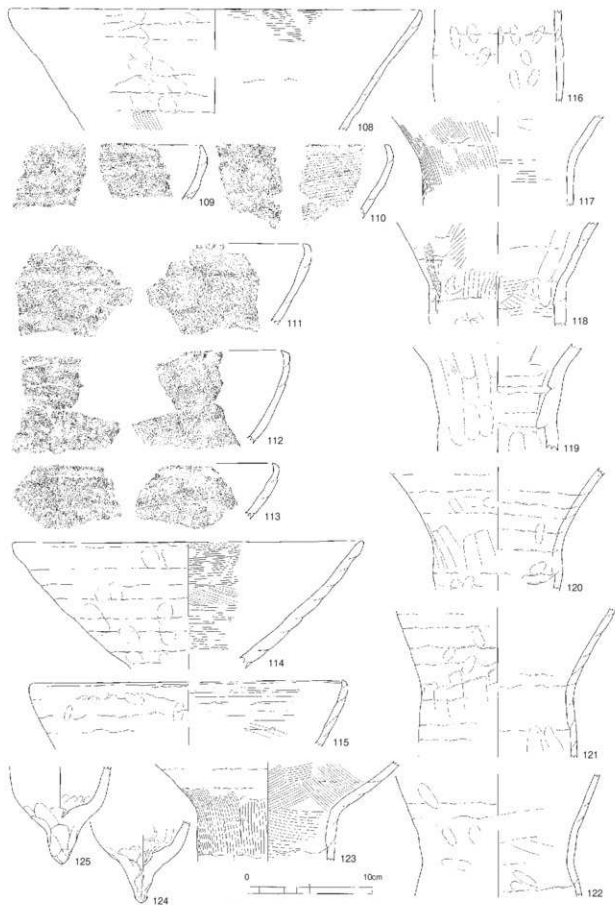
第22図 遺物実測図3 (S=1/3)



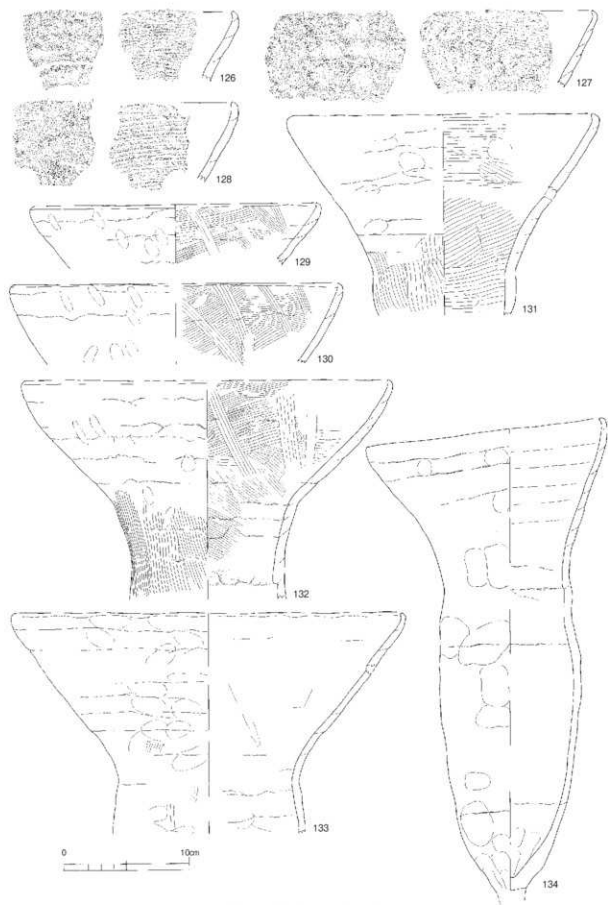
第23図 遺物実測図4 (S=1/3)



第24図 遺物実測図5 (S=1/3)



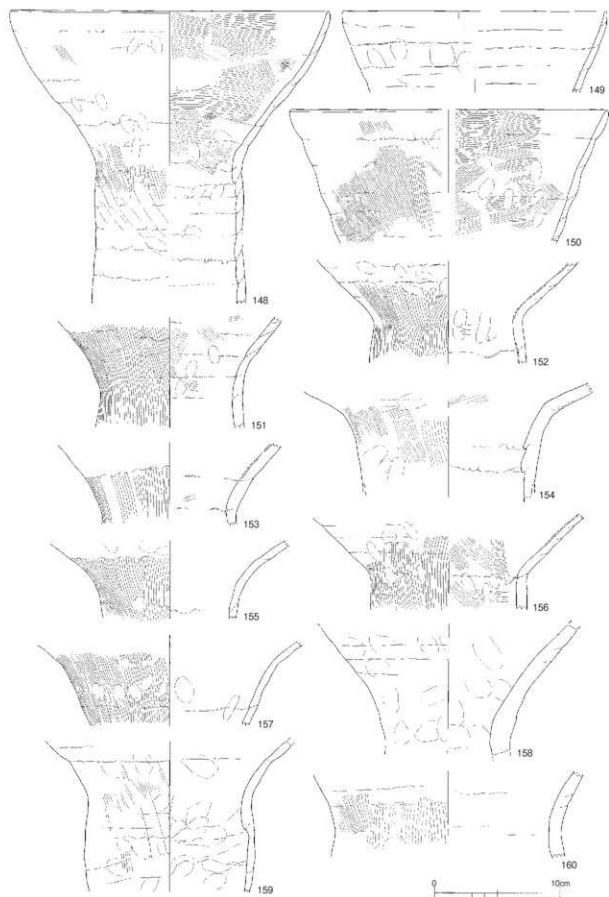
第25圖 遺物実測図 6 (S=1/3)



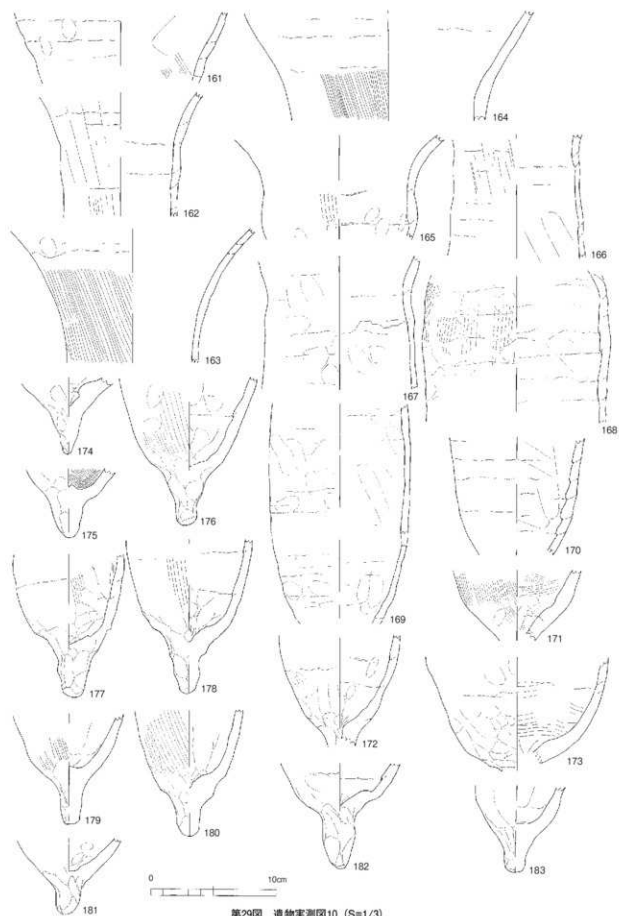
第26図 遺物実測図7 (S=1/3)



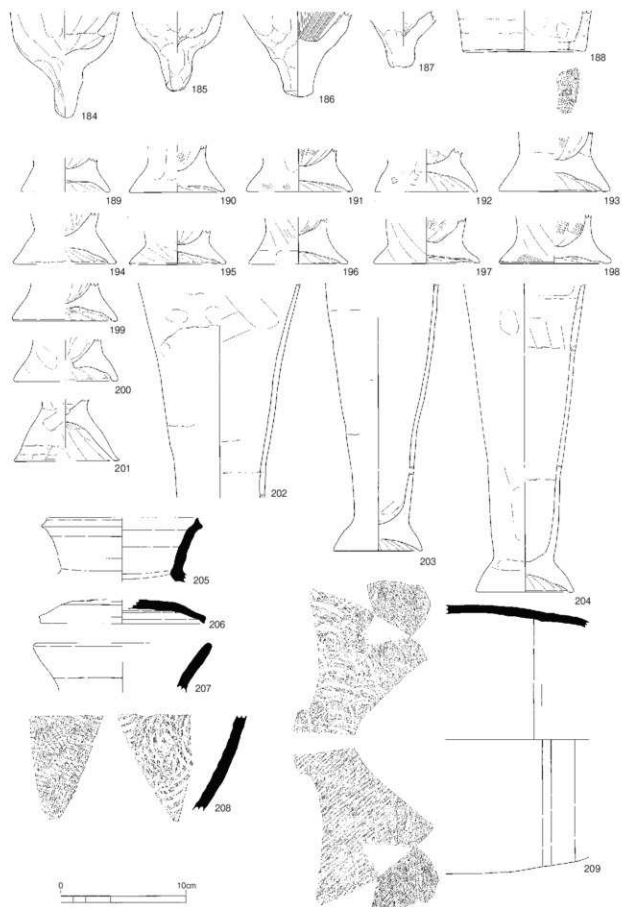
第27回 遺物実測図 8 (S=1/3)



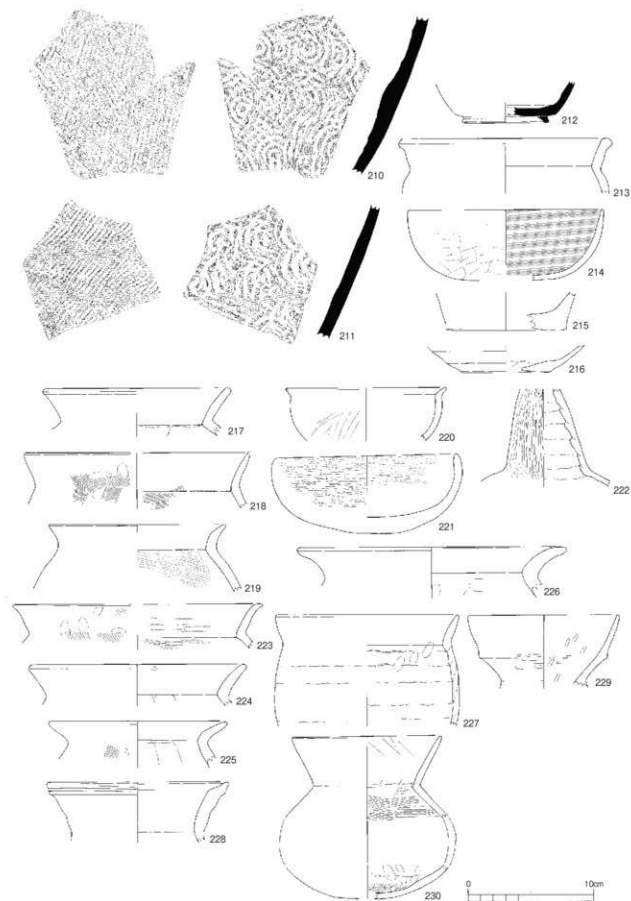
第28図 遺物実測図9 (S=1/3)



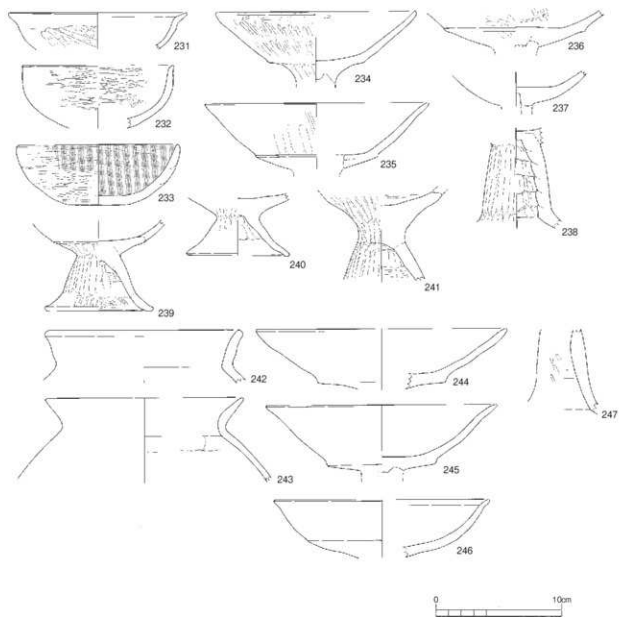
第29圖 遺物実測図10 (S=1/3)



第30図 遺物実測図11 (S=1/3)



第31圖 遺物実測図12 (S=1/3)



第32図 遺物実測図13 (S=1/3)

| 調査年度 | 調査地点 | 調査者 | 調査内容 | 調査期間 | 調査結果 | | 調査方法 | 調査回数 | 調査時間 | 調査費用 | 調査結果 | 調査結果の概要 | 調査結果の備考 |
|------|------|-----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|---------|---------|
| | | | | | 調査回数 | 調査時間 | | | | | | | |
| 1971 | 101 | 田 4 | 2 | 調査結果 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 |
| 1975 | 148 | 田 4 | 2 | 調査結果 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 |
| 1977 | 121 | 田 1 | 2 | 調査結果 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 |
| 1978 | 129 | 田 4 | 2 | 調査結果 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 |
| 1979 | 165 | 田 4 | 2 | 調査結果 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 |
| 180 | 129 | 田 4 | 2 | 調査結果 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 |
| 181 | 112 | 田 3 | 2 | 調査結果 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 |
| 182 | 172 | 田 4 | 2 | 調査結果 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 |
| 183 | 173 | 田 4 | 2 | 調査結果 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 |
| 184 | 210 | 田 4 | 2 | 調査結果 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 |
| 185 | 179 | 田 4 | 2 | 調査結果 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 |
| 186 | 160 | 田 4 | 2 | 調査結果 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 |
| 187 | 89 | 田 2 | 2 | 調査結果 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 |
| 189 | 79 | A 3 | 2 | 調査結果 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 |
| 189 | 244 | 田 2 | 3 | 調査結果 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 |
| 190 | 241 | 田 2 | 2 | 調査結果 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 |
| 191 | 213 | 田 2 | 2 | 調査結果 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 |
| 192 | 203 | 田 3 | 2 | 調査結果 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 |
| 193 | 206 | 田 2 | 2 | 調査結果 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 |
| 194 | 99 | 田 3 | 2 | 調査結果 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 |
| 195 | 96 | 田 3 | 2 | 調査結果 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 |
| 196 | 243 | 田 2 | 2 | 調査結果 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 |
| 197 | 242 | 田 2 | 2 | 調査結果 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 |
| 198 | 259 | 田 2 | 2 | 調査結果 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 |
| 199 | 88 | 田 2 | 2 | 調査結果 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 |
| 200 | 142 | 田 2 | 2 | 調査結果 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 |
| 201 | 192 | 田 2 | 2 | 調査結果 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 |
| 202 | 193 | 田 2 | 2 | 調査結果 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 |
| 203 | 185 | 田 2 | 2 | 調査結果 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 |
| 204 | 184 | 田 2 | 2 | 調査結果 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 |
| 205 | 215 | 田 5 | 1 | 調査結果 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 |
| 206 | 216 | 田 5 | 2 | 調査結果 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 |
| 207 | 81 | A 3 | 2 | 調査結果 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 |
| 208 | 154 | 田 4 | 2 | 調査結果 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 |
| 209 | 317 | 田 5 | 2 | 調査結果 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 |
| 210 | 155 | 田 4 | 2 | 調査結果 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 |
| 211 | 100 | A 3 | 2 | 調査結果 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 | 調査 |

第7表 出土遺物観察表 5

第4章 ま と め

今回の調査区は、珠洲市馬繰町地内の日本海に面した海岸段丘に立地し、背後には宝立山地が位置するもので、調査の結果、3面の遺構検出面において製塩関連遺構を確認し、多量の製塩土器を中心に須恵器・土師器を出土した。以下、確認された遺構面について下層から上層に向け3段階を設定して概要を記してまとめとする。

第Ⅰ段階（第3面）（第5・6・9図参照）

基盤層にあたる淡褐色砂層をベースとする第3面（検出面標高4.8～5.3m）において、土坑や落ち込み・溝・小穴等を検出し、倒壺型脚台タイプを主体とした製塩土器のほか土師器が出土した。

落ち込みでは、不整隅丸方形を呈するSX3の内側で、南側に位置する落ち込みにおいて底面を中心に被熱面が認められることから製塩炉（地床炉）跡の可能性が考えられる¹⁾。また、3区を中心に小穴を30数穴確認しているが建物等を復元し得るものではなかった。

出土遺物による時期としては古墳時代中期から同後期の5世紀後半から6世紀後半～7世紀代の幅を確認しているが、製塩土器では倒壺型脚台タイプを主に出土しており、概ね上限の時期を中心とするものであったと思われる下限の時期迄まで、同タイプによる土器製塩を小規模ながら行っていたと考えられる。また脚部が長く細い形状をした棒状脚尖底タイプ（脚b）の製塩土器の出土も確認されており、これ以降継的に営まれたと思われる。

第Ⅱ段階（第2面）（第5・6・9図参照）

南側後背丘陵裾辺りをカットしてその丘陵土（粘土）を用いて北（海）側に向けて緩やかな傾斜を持つ平坦面を造成して作業面を設けたもので、第2面（検出面標高4.9～5.4m、厚さ0.1～0.45m）が相当する。区画溝等を伴う製塩炉跡を中心に土坑・小穴等の遺構が検出され、棒状脚尖底タイプを主体に多量の製塩土器に伴って須恵器・土師器が出土した。

区画溝は東西16m、南北6m以上の範囲に9条確認しており、その内の弧状に回る溝は山側で2条検出し、その内部には北側に開口する「コ」字状の溝が確認されている。「コ」字状の溝は東西5.3m、南北2.8m以上の範囲に東西方向に連続した形で確認でき、SD10・11で区画される内部は東西2.4mを測り、被熱粘土面が確認され製塩炉（地床炉）跡と想定される。これらの弧状に回る溝は、山側からの流水を防ぐ排水溝として機能していたと思われる、区画溝を伴う製塩炉の存在が明らかとなった²⁾。

さらにこれらの溝の機能が失われた後においても被熱跡（SS）が数箇所において認められ、活動が継続的であったと考えられる。

製塩土器は棒状脚尖底タイプを主体としているが、小形平底タイプ及び支脚も僅少なながら確認している。棒状脚尖底タイプは前段階末期以降よりその使用（脚b）を認めるが、この段階では、胴部形状等が細身の製品が後続して認められ、平安時代の9世紀前～中葉以降は胴部径に膨らみをもつものからさらに大型化への推移がみられるとともに、小型平底タイプ及び支脚の使用も認めつつ10世紀代迄までは活動が確認できると考えられる。棒状脚尖底タイプは主に煎熬工程に用いられると思われるが、小型平底タイプ及び支脚については、焼塩等の用途も想定し得るものである。

第Ⅲ段階（第1面上面～2面上面）（第5・6・7・8図参照）

第Ⅱ段階の活動が終了後、南側丘陵土の黄（青）灰色系粘質土による整地が行われ大きくは3段階（粘土面①～③）の単位を捉えることができた。初期段階の粘土層下面（粘土面③）から最上層（粘土面①）の堆積（最大厚0.6m程度）にあたっては北側への若干の広がりが認められ、いずれも北側

に向って緩やかに傾斜する。

第三-i 段階（第1面～2面上面） 粘土による造成層の初期段階にあたる粘土下面＝粘土面③は標高5.4～5.5m程度で検出され、東西幅約44m、南北幅は中央部で北側に張り出す様相を呈しており、西側で約9m、東側で約4mと確認され、調査区内で確認された面積は約175㎡を測り、さらに丘陵側へと延びることから地形的にみて後背傾斜地裾辺りまで広がりを持つと思われる。また、調査区中央部で北側に張り出す点については、区画を分ける意味合いが強いものと思われる³⁾。

第三-ii 段階（第1面） 前段階後、厚さ0.02、0.03mを測る淡黒灰色シルト質土と黄（青）灰色系粘質土による互層の整地状況が細かい単位で複数ありその上面を粘土面②として認識した。検出面は標高5.5～6m（i 段階からの厚さ0.1～0.5m）を測り、範囲はほぼ前段階と同じである。この粘土面②の北側では、前段階から一部認められたものの土坑や焼土・土器溜り等を検出しており火処の存在も窺われる。これらは廃棄土坑の様相が強いもの（SS1・2等）が主体的であるが、中には粘質土の整地面上に被熱跡がみられる礫等が認められるもの（SS3・6等）や、土坑（SK2）が確認⁴⁾された。

第三-iii 段階（第1面上面） 最終面の標高5.5～6.1m（ii 段階からの厚さ0.05～0.2m）で検出された粘土面③は前段階より北側に約1m程度広がりをもせるものであるが中央部の張り出しは南側へやや後退する。調査区内で確認された面積は約180㎡である。

これら第三段階における粘土層（粘土面①～③）は、第二段階（第2面）まで確認された土器製塩の後に人工的に整地されたことと、粘土層の北側で検出された焼土や被熱跡のある礫等といった火処跡が認められること等から、製塩作業に係る造成基盤と認めると、その性格は湯浜式製塩法の塗浜塩田に比定できるものと考えられる。粘土層には、焼土・炭粒・土器細片等を微量に含むが時期を特定できるような遺物の出土は認められなかった⁴⁾。また、粘土層北側の土器溜り等においては少量の土師器埴皿類が混入する前段階の製塩土器等を含むが、これらは廃棄層や土砂の移動等により再堆積したものと考えられる。よってこれらの粘土層と火処を利用した生業は、鉄釜を使用する製塩であった可能性が高いと考えられる。

以上、本遺跡は古墳時代中期より平安時代末頃にわたって製塩活動を行ってきたものであるが、それには背後の周辺丘陵における燃料確保が容易に出来たという生産環境等も整っていた結果でもあったと考えられる。

注

- 1) 北側の落ち込み内部には炭が集中する小穴が確認されるが、これは燃料（薪など）として使用された形跡と思われる。
- 2) このような遺構の状況については、京都府舞鶴市浦入遺跡で確認されている。特にQ地点では山側を削りし平坦面を造成して、3～10mの被熱する平坦面を海に向って「コ」ないし逆「L」字状に開く周溝で区画する製塩炉（方形区画型）が奈良時代後半（8世紀後半）～平安時代末（12世紀後半）の時期に確認されている（吉岡博之ほか2001『浦入遺跡群発掘調査報告書』遺構編・遺物図版編 舞鶴市教育委員会、辻本和美ほか2001『浦入遺跡群』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）。
- 3) 東西幅については、東側は直ぐに丘陵の張り出しがみられることから調査区よりさほど延びないと思われ、西側については、調査区西端外の試掘調査で確認された粘質土が近似することから、さらに延びる可能性はあると思われる。また、粘土が北側に張り出す点を区画とした場合、その西側区画の東西幅は約25mとみられ、粘土面③・②では南側を12mとすれば約300㎡、粘土面①では南側を8mとすれば約200㎡となるがあくまで推測で確認を得たものではない。
- 4) 土坑（SK2）の性格については不明な部分もあるが、七尾市赤浦やまあと遺跡検出土坑例からみれば鹹水溜の機能が考えられ、土坑内の別容器に鹹水を採取したものとしてみられる。これによれば溜出装置から流下する鹹水を受ける容器を溜出口より下に設置するために掘削された土坑と想定されるものである。あるいは炭屑等の堆積が顕著なことからそういったものを溜めた遺構とも思われるが、一帯が廃棄層や土砂移動に伴う基本土層IV層の黒灰色粘質土（炭層）で覆われることから可能性は低く、埋土における焼土や被熱礫等は周辺での炉等と関係したもので、それが廃棄されたものと思われる。

5) 時期的には確定できないが、概ね第2面の後とすれば平安時代後半～末以降には造成が開始された可能性が考えられ、粘土層の堆積の厚さからすればかなりの長期間にわたっての利用が考えられる(少なくとも土器塚埋類が示す11世紀後半～12世紀初頭以降も埴田基盤整備は行われたものと考えられる)。県内での揚浜式製塩法の埴田産の検出事例は現在のところ2例確認している。羽巾流・柴垣海岸E・F道跡で8世紀前半の埴田と鉄釜炉と推定される炉跡及び土器製塩炉等が検出されている。七尾市赤浦やまあと道跡は9世紀末葉から10世紀前葉において小規模な埴田に鹹水溜と土器製塩炉を確認しており、採鹹から煎煎する工程を具体的に確認できる。

補) 江戸時代以降の能登揚浜式埴田について天保年間に記された『製塩録』・『御塩方定留』及び明治期の『大日本塩業全書』等を基にした廣山堯道氏の考察(廣山1983・1990)によれば「地盤の構造は、波当りの度合いによって一尺ないし三間ほどの石垣を積み、内側を埋めて礫を敷き、その上に真土と砂を混ぜてはり、さらに上に粘土をはる。これを踏みあるいは打ち固めて乾燥させ、さらに粉砂を敷いて盤突で突きならし、この上に盤砂を四分ないし一寸の厚さに散布した」とする。また、地盤面は平坦が良いとされるが大抵雨水が流れる程度の傾斜があり、修復時期は時に応じて一定ではなかったが粘土盤の使用年限は10年ほどとされていたことがわかる。盤砂は真砂を最良とし、色調は太陽光の吸収率の関係からか青黒色のものがよかつたとする他、埴田の境界は、粘土をかまはく型に練り固めたもの、古板片、藁束、太縄等で区画し、埴田の周囲は自然石を並べた状況であった。このほか作業の実態についても江戸時代から昭和期にかけての資料における内容の差はほとんどないことから細部は別として基本的な作業の変化はみられないと指摘する。当地より西へ約6km行った海岸では、現在も揚浜式埴田が営まれその技術が伝承されている。昭和34・35年の能登埴田整理により大谷地区をはじめ埴田業者が廃止したが、その保護ならびに観光資源を目的として存続させたもので、唯一現在も操業しているのが角花家(珠洲市清水町)である。その状況を調査したのも(西山郷史1991「3製塩」[石川県の諸業]石川県教育委員会)等によると埴田約50(～60)坪が一棟(一枚)で、粘土は年毎で、盤砂は2年毎に入れ替え、粘土の厚さは約15cmで、砂は約2cmとある。粘土及び藁(近年は廃材など利用)は後(南)方の丘陵に入り採取し、砂は粒の細かいものを珠洲市馬繰町からトラックで運搬するが以前は舟で輪島市大川町の浜へ採取しに行っており、釜屋は埴田に接した浜側にある。本道跡の状況のみた場合(江戸時代以降の事例をそのまま当てはめるのは危険だが)、粘土層における細かい単位での淡黒灰色シルト質土と黄(青)灰色系粘質土の互層状態が確認される点などは、何度も造成された結果であると思われる一度にどの段階まで作業を行ったかまでの把握は出来なかったが、比較的しまった土質はその作業工程を反映したものと理解される。また区画については、調査区中央近辺で粘土による畦程度があった可能性が考えられる。火処については釜屋を浜側に置く事例から作業上特に問題はないように思われる。

引用・参考文献(前掲文献は除く)

- 大西 顕 2008 『七尾市小島西道跡』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
 垣内光次郎・川畑 誠 2001 『七尾市赤浦やまあと道跡』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
 小嶋孝孝 1988 『製塩土器の検討』『寺家道跡発掘調査報告』Ⅱ 石川県立埋蔵文化財センター
 近藤義郎 1984 『土器製塩の研究』青木書店
 下村好美 1997 『美麻奈比古神社前道跡出土の製塩土器について』『美麻奈比古神社前道跡』穴水町教育委員会
 珠洲市史編さん専門委員会 1979 『製塩編』『珠洲市史』第四巻=資料編 神社・製塩・民俗 石川県珠洲市役所
 関森香住¹⁰⁾ 2000 『無間カキノウラ道跡』能登島町教育委員会
 立原秀明・大西 顕 2004 『珠洲市 鶴島道跡・鶴島ツギザキ道跡』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
 戸潤幹夫 1992 『第5章 製塩道跡』『新修七尾市史』1考古編 七尾市役所
 富山大学人文学部考古学研究室・石川考古学研究会 1991 『能登埴・柴垣製塩道跡群』富山大学考古学研究报告第5冊
 中島俊一 1981 『四分高井道跡発掘調査報告』石川県埋蔵文化財センター
 橋本澄夫 1973 『柴垣・滝土器製塩道跡』[羽巾市史] 原始・古代編 羽巾市役所
 橋本澄夫 1974 『小浦土器製塩道跡』[志賀町史] 資料編第一巻 石川県羽巾郡志賀町役場
 橋本澄夫 1976 『珠洲市の集落道跡と土器製塩道跡』『珠洲市史』第1巻資料編 自然・考古・古代 石川県珠洲市役所
 橋本澄夫 1981 『内浦町の土器製塩道跡と製塩土器』[内浦町史] 第一巻 自然・考古・社寺 石川県珠洲市内浦町役場
 橋本澄夫 1986 『土器製塩道跡』[石川県能登町真監道跡] 能登町教育委員会・真監道跡発掘調査団
 廣山堯道 1983 『日本製塩技術史の研究』雄山閣出版
 廣山堯道 1990 『塩の日本史』雄山閣出版
 松山和彦¹¹⁾ 2003 『珠洲市 宇治役場表道跡』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
 三浦純夫 1990 『第5章ナカノB道跡の調査』[赤住道跡群] 石川県志賀町教育委員会・赤住地区埋蔵文化財調査団
 三浦純夫・伊藤雅和 2005 『能登町 真監製塩道跡』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
 山本三郎¹²⁾ 1979 『兵庫原堂山道跡-埴田道構を中心に-』『日本考古学年報』32 日本考古学協会
 四條嘉彦¹³⁾ 1995 『ヤトン谷内道跡』石川県中島町教育委員会
 米澤義光 1980 『志賀町米浜道跡』石川県立埋蔵文化財センター



東から遺跡を臨む



西から遺跡を臨む



第2・3面完掘状況（垂直）



第1面検出状況（西から）



第1面粘土層断面（トレンチ②・北西から）



第2面B3区炉跡（被熱面）検出状況（東から）



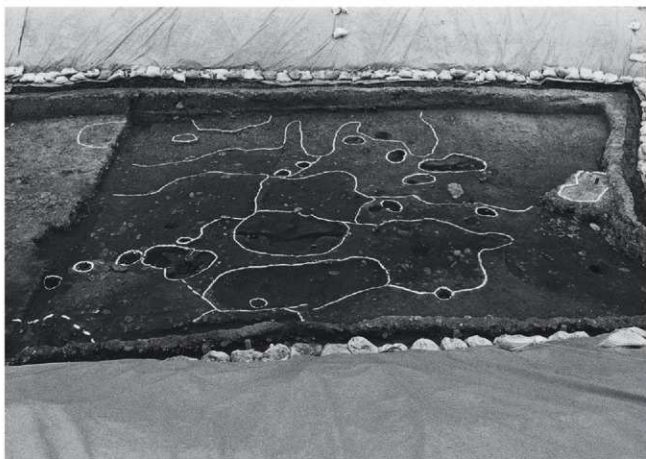
第3面SX3 被熱面検出状況（東から）



第1面検出状況（東から）



第2面3・4区発掘状況（垂直）



第3面2区完掘状況（北から）



第3面3・4区完掘状況（南から）



SS1 土層断面 (西から)



SS1 完掘状況 (西から)



SS2 検出状況 (北から)



SS2 土層断面 (西から)



SS2 完掘状況 (北から)



SS2掘削後 検出状況 (西から)



SS5 検出状況 (南から)



SS5 土層断面 (東から)



SS3 検出状況 (西から)



SS3 土層断面



SS3 焼土層掘削後 標集中1・4検出状況 (西から)



SS3 焼土層掘削後 標集中1・4検出状況 (東から)



SS3 焼土層掘削後 標集中2検出状況 (南から)



SS6・標集中3 検出状況 (南から)



SK2 土層断面 (南東から)



SK2 完掘状況 (東から)



SS8 完掘状況 (東から)



作業風景



SS11・12 土層断面 (南から)



SS13 完掘状況 (東から)



SS14 完掘状況 (東から)



SS15 完掘状況 (南から)



SS17 検出状況 (東から)



SK3 土層断面 (南から)



区画溝他東部 完掘状況 (北から)



区画溝他西部 完掘状況 (北から)



西区画・被熱面 完掘状況 (南から)



東区画 完掘状況 (南から)



被熱面 土層断面 (北から)



区画溝他 (SS2下層部) 土層断面 (西から)



SK7 土層断面 (西から)



SD8 土層断面 (南から)



SD7・SD9 (東部)・10 土層断面 (西から)



SD9 (西部) 土層断面 (東から)



SD11・12 土層断面 (南から)



トレンチ②23層上面検出状況 (北から)



B5区第2面 (トレンチ③15層上面) 土層断面 (東から)



B5区第2面 (トレンチ③15層上面) 発掘状況 (北から)



P32・33 土層断面 (南から)



P33 土器器出土状況 (南から)



SX3 土層断面 (南から)



SX3 完掘状況 (東から)



SK11等 完掘状況 (東から)



トレンチ① 土層断面 (北西から)



トレンチ② 土層断面 (北西から)



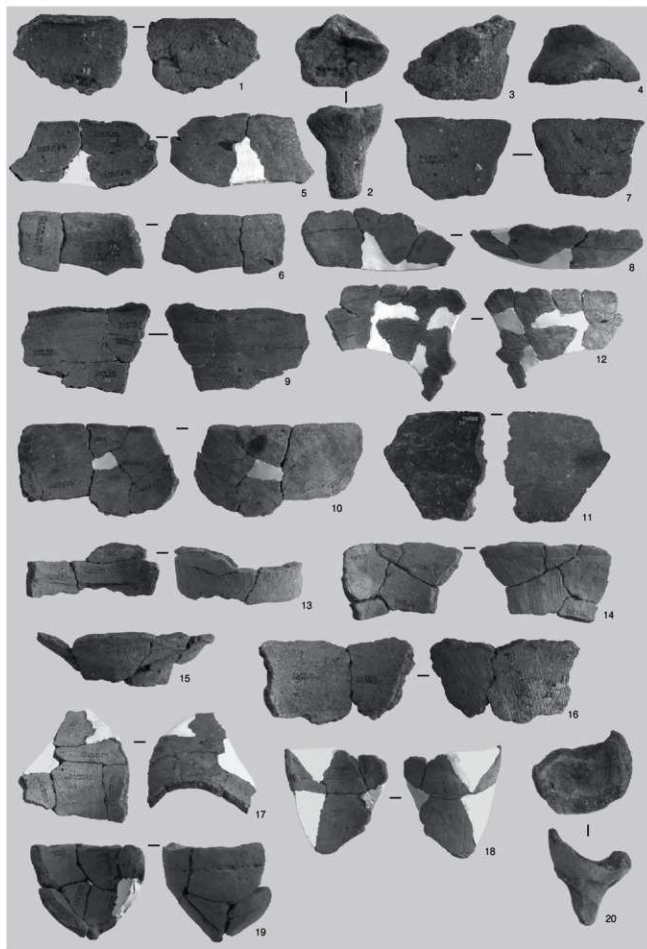
トレンチ③ 土層断面 (北西から)

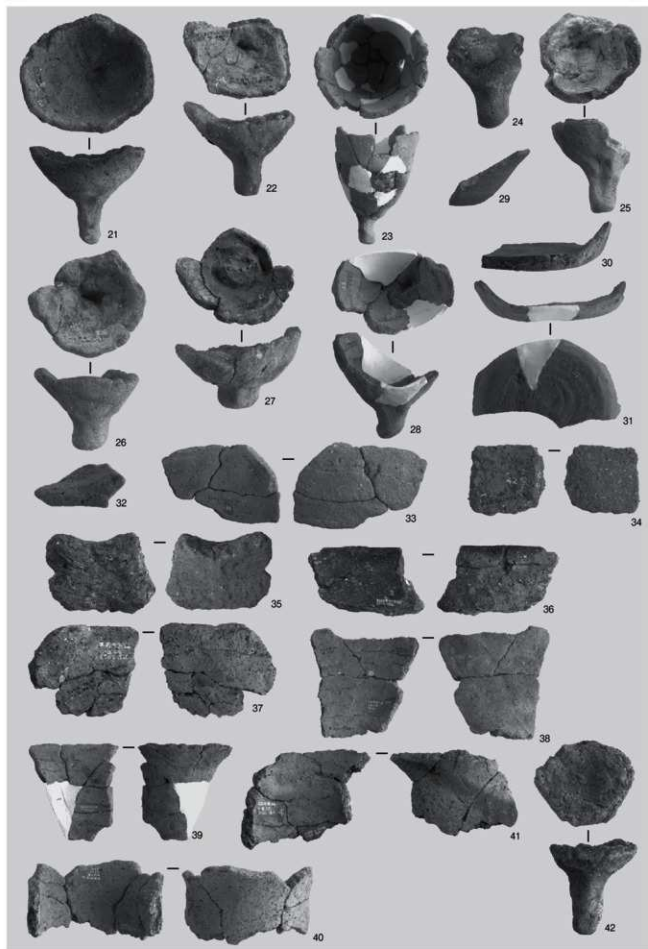


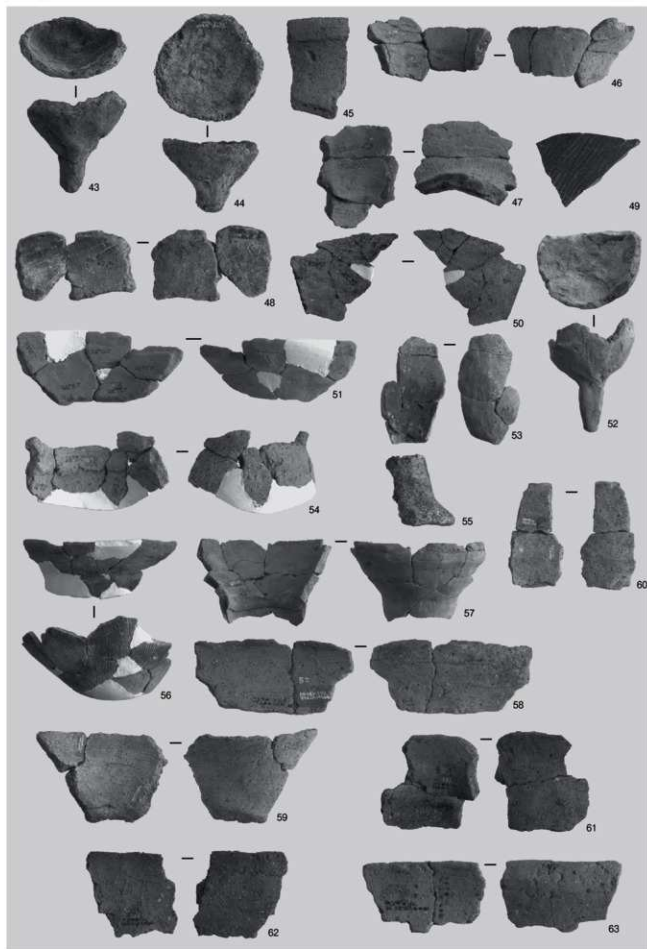
A2区拡張トレンチ 土層断面 (北から)

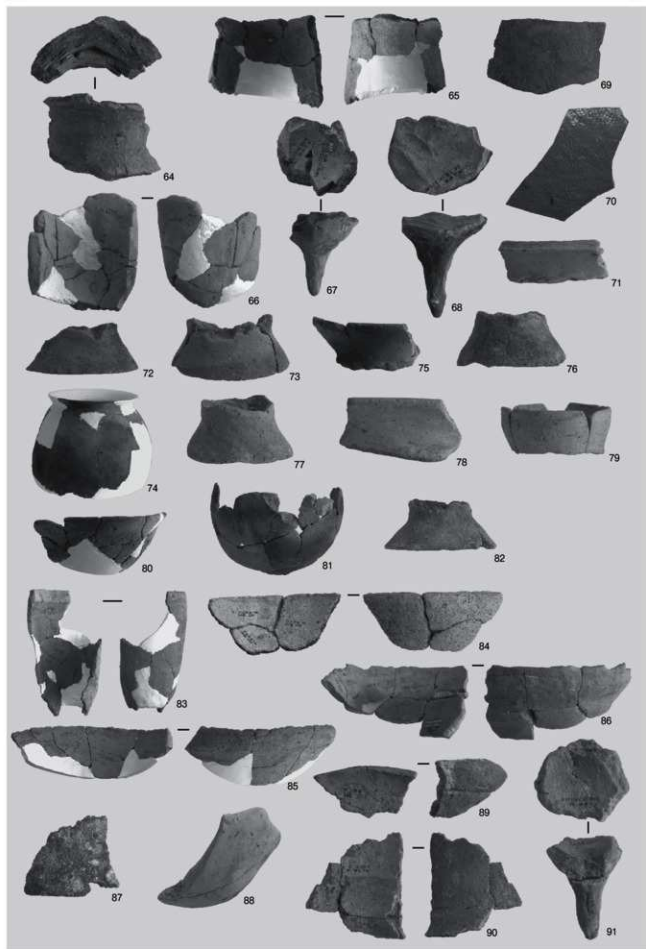


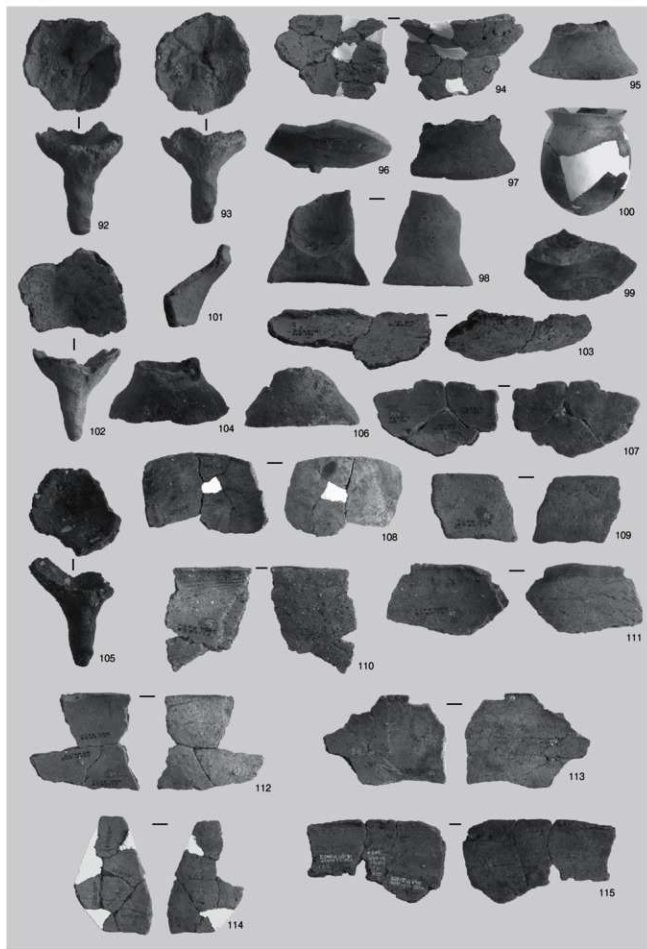
A4区拡張トレンチ 土層断面 (北から)

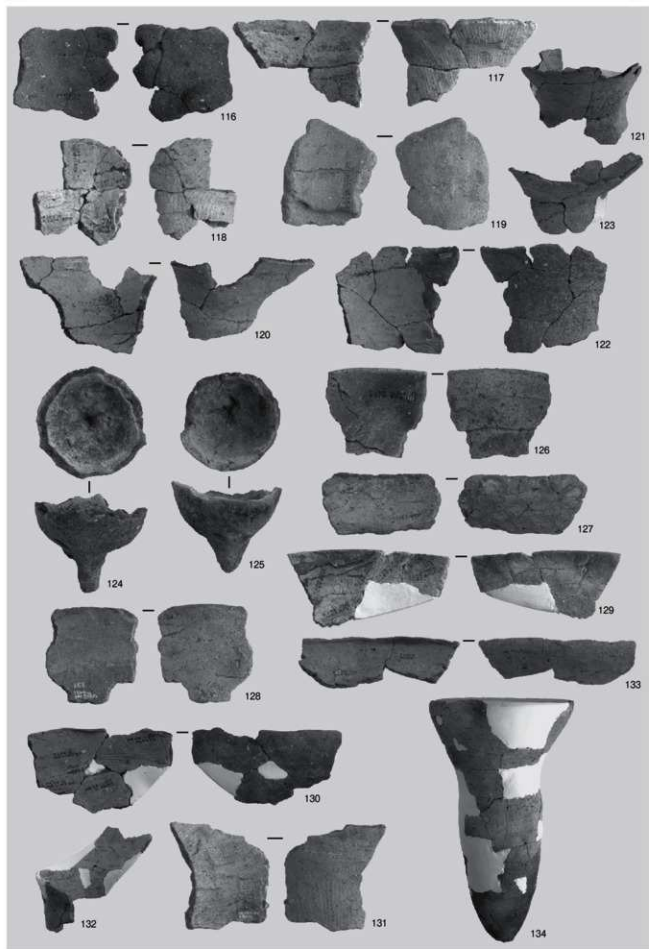


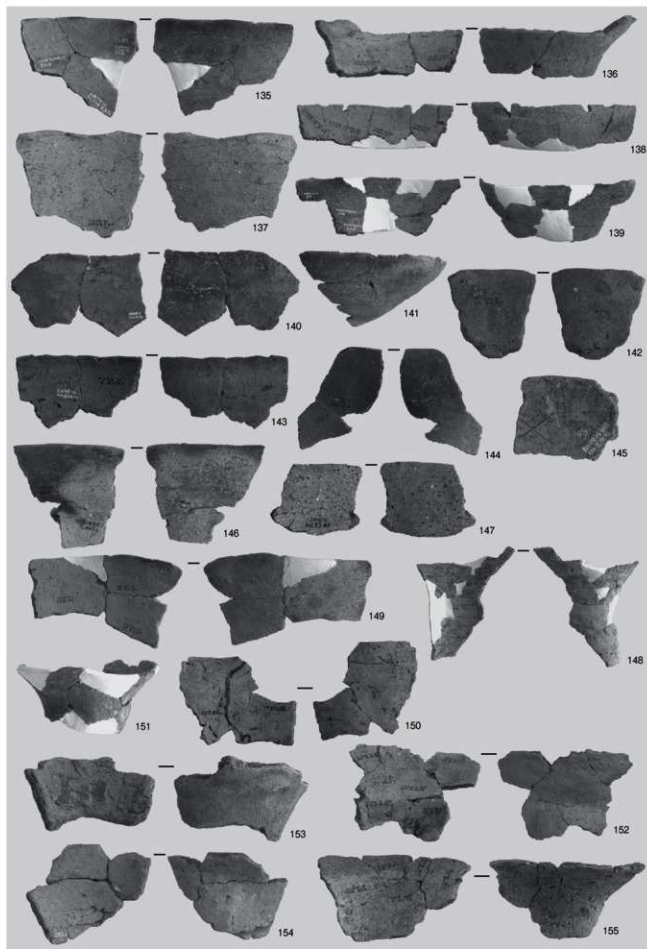


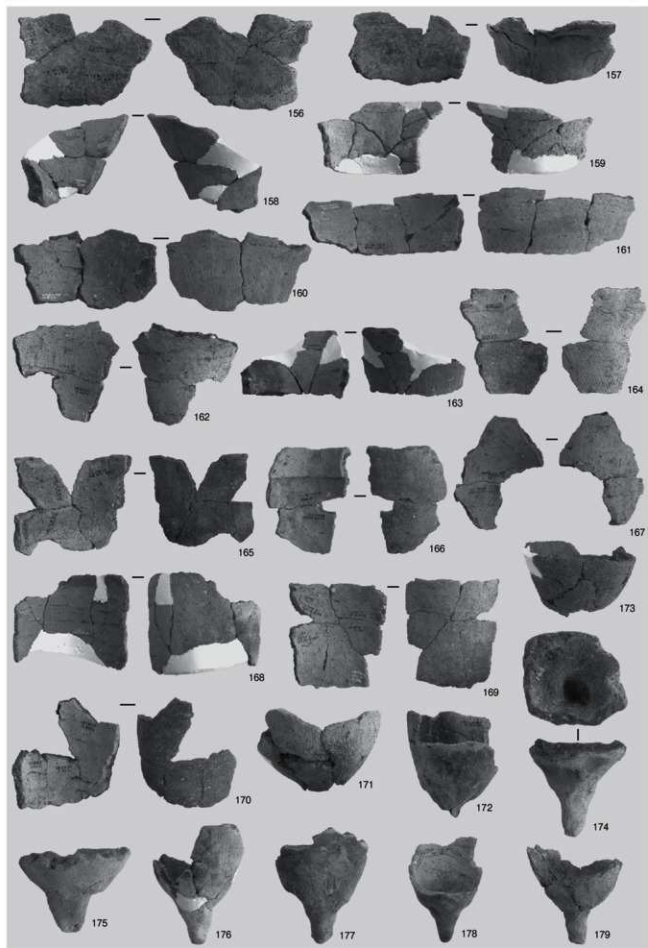


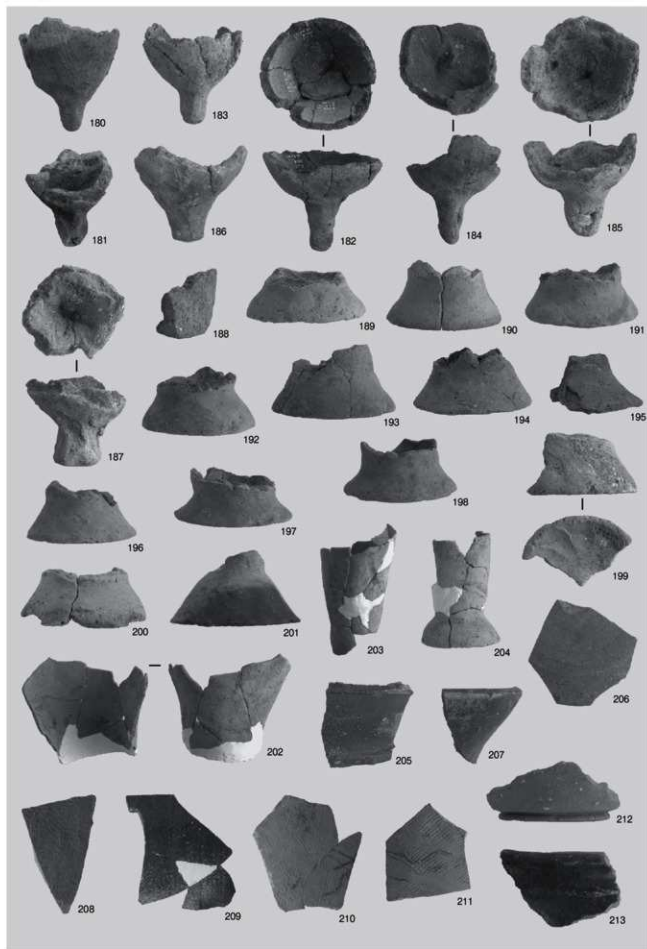


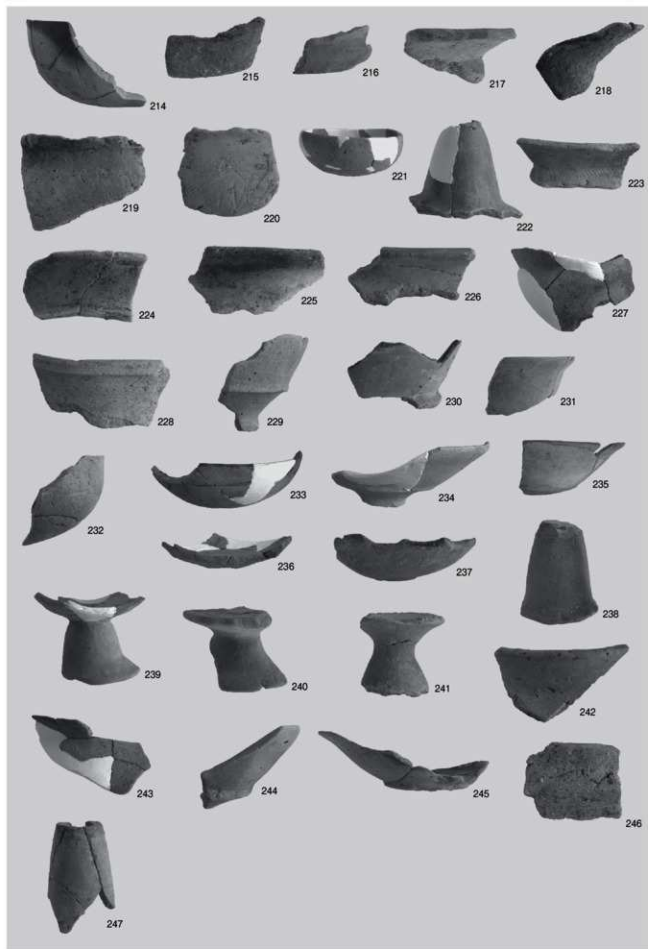












報告書抄録

| ふりがな | すずしおおたにちゅうがっこうひがしいせき | | | | | | | |
|-------------------------------|---|-----------|------------------|-------------------|--------------------|---------------------------|--------|------------------------|
| 書名 | 珠洲市大谷中学校東遺跡 | | | | | | | |
| 副書名 | 国道改築一般国道249号に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | | | | | | | | |
| シリーズ番号 | | | | | | | | |
| 編著者名 | 土屋宣雄、宮川勝次 | | | | | | | |
| 編集機関 | 財団法人石川県埋蔵文化財センター | | | | | | | |
| 所在地 | 〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1 TEL076-229-4477 | | | | | | | |
| 発行機関 | 石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2010年3月31日 | | | | | | | |
| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| あおたにちゅうがっこうひがしいせき 大谷中学校東遺跡 | いしかわけん 石川県 すずし 珠洲市 まつなまきまち 馬繰町 | 17025 | | 37度 29分 57秒 | 137度 10分 43秒 | 20060510 ～ 20060724 | 1,150㎡ | 道路（一般 国道249号） 改築 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| 大谷中学校東遺跡 | 生産遺跡 (製塩) | 古墳 ～平安 | 製塩炉、溝、土 坑、粘土面 | 製塩土器、須恵器、 土師器 | | | | |
| 要約 | 古墳時代中期から平安時代末頃にかけて3面の遺構検出面において製塩関連の遺構・遺物を確認した。製塩炉跡は地床炉で礫・珪藻土を伴うものや区画溝を伴うもの等を確認し、製塩土器（倒壺型脚台、棒状脚尖底、平底、支脚）、須恵器、土師器が出土した。また、粘土面については、製塩作業に係る造成基盤とみられ、その性格は揚浜式製塩法の塗浜塩田に比定できる可能性が高いものである。 PDFあり。 | | | | | | | |

珠洲市 大谷中学校東遺跡

発行日 平成22(2010)年3月31日

発行者 石川県教育委員会

〒920-8575 石川県金沢市藤月1丁目1番地

電話 076-225-1842(文化財課)

財団法人石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1

電話 076-229-4477

E-mail address mail@ishikawa-mibun.or.jp

印刷 前田印刷株式会社